共、兎に角其交換的意義が弱められて殆んど and に接近し複數の一致を見る事がある。例へば

Life or death, felicity or lasting sorrow, *are* in the power of marriage.—*Jeremy Taylor.*

Death, emigration, or personal slavery, *were* the only alternatives.—*Freeman.*

126. 從文に於て**關係代名詞**が主語たる時、關係代名詞には人稱と數とを示す形態上の變化はなけれ共、當然其の先行詞と一致するものと見做されて居る故に、其に對する述語の人稱と數とは先行詞の人稱と數とによりて定まるものである。例へば

I that *speak* unto thee am he.

Thou who *stealest* fire

From the fountains of the past.

但し事實に於ては此に反する例を見る場合が凡そ四ッある（その外にいつも極つて別の一致法による場合があるがそれは次項にゆづる）。卽ち

(1) 關係代名詞の前が one of…なる時、例へば

I resemble one of those animals that *has* been forced from its forest to gratify human curiosity.—*Goldsmith.*

This is the epoch of one of the most singular discoveries that *has* been made among men.—*Hume.*

嚴密なる文法の形式より言はゞ上例は何れも has の代りに have を用ふべきものであるけれ共、是を言ふ人の腦底に入りて考ふれば誠に自然なる言方と見なければならぬ。何となれば言者の腦裡には one の觀念が最も强烈であるからで言語が心的狀態の反影である事を思はゞ餘りに非議するは當らない事である。

(2) one of なくとも先行詞が主文に於て to be に對する補語なる時、述語は先行詞と一致せずして主語と一致する事がある。例へば

I am a man who *have* no wish on earth but your glory and happiness.—*Scott.*

の如きである。此も言者の心的狀態より見れば最も自然なる結果である。何となれば I なるものと have no wish との間には腦裡最も强烈なる相互の牽引力があつて其間何等第三者の闖入を許さないからである。尙ほ次の諸例を見れば此間の消息は自から明瞭であらう。

Thou art the God that *doest* the wonders.*

—*Psalms*, lxxvii. 14.

If thou beest he—but O how fall'n! how changed

From him, who in the happy realms of light,

Clothed with transcendent brightness, *didst* outshine

* 尙聖書には 2 *Samuel*, v. 2; 1 *Chronicle*, xi. 2; 1 *Kings*, xiii. 14 等に同樣の例を見る。又此間の混亂の著しき例は

Ah, *you're one* that *has* wasted *your* gifts, *you have!*

—Doyle, *The Sign of Four*, v.

Myriads, though bright!—*Milton.*

又次の例に於ては第一の動詞だけ文法的に一致し、第二以下の動詞に於ては其文法的關係が忘れられて心的狀態の明らさまなる發露を見る點に於て極めて興味が深い

Are you not he
That *frights* the maidens of the villagery,
Skim milk, and sometimes *labour* in the quern,
And bootless *make* the breathless housewife churn?
—*Shakespeare.*

(3) 先行詞が呼懸けに用ひられたる名詞なる時、動詞は二人稱となる。卽ち玆に於ても吾人は心的狀態が文法の形式を打破して居るのを見るのである*。例へば

Sing heavenly Muse, that on the secret top
Of Oreb, or of Sinai, *didst* inspire
That shepherd.—*Milton.*

Cromwell, our chief of men, who through a cloud
Not of war only, but detractions rude,
Guided by faith and matchless fortitude,
To peace and truth thy glorious way *hast* ploughed.
—*ibid.*

(4) 上例の場合と相反し、詩に於ては呼かけが thou

* Cf: O Lord, that *lends* me life.—*Shakespeare.*

なる時之を受くる關係代名詞に對する述語の動詞の語尾の省略せられたのを見る事がある。例へば

O thou my voice inspire
Who *touched* Isaiah's hallowed lips with fire.—*Pope.*

127. 注意を引く爲めに用ひられたる It is……の次に來る關係代名詞が主格たる時、その從文に於ける述語は此に對する補語と人稱數に於て一致する。例へば

It is I that *am* wrong.

It is you who *make* dress pretty, and not dress that *makes* you pretty.—*G. Eliot.*

これは今日如何なる文法家と雖も恐らく反對するものはないであらう。然も that の先行詞は明かに It である。すれば何故に此の一致法が行はるゝかならば、前節 (1) (2) (3) の理が分かれば立所に諒解が出來るのである。卽ち "It" は文法の形式上 that の先行詞ではあるけれ共一度言者の腦裡に入つて見れば、それは決して次に來る叙述中に含まるゝ動作若しくは狀態等の主たり得る性質のものではないのである。卽ち換言すれば It is I that am wrong と言ふ時言者の腦裡に存する事實は I am wrong より外ないからである*。尤も稀には之に對する反例もある。例へば

Nay, this time it is thou who *forgets.*—*Scott.*

* 佛蘭西語に於て斯の如き事を言ふ二ツの形式を比較して見ても此間の消息がよく分かると思ふ。例へば "It is not he that said so" と云ふには
Nous, nous n'*avons* pas *dit* cela.
Ce n'est pas nous qui *avons dit* cela.
で兩方共 *avons dit* を用ふるのである。

第十章 一致の法則——(其二)

128. 文法上所謂**同格語**はその說明せらるゝ名詞又は代名詞と格に於て一致する。例へば

So work the *honey-bees*,

Creatures that by a rule of Nature teach

The art of order to a peopled kingdom.—*Shakespeare.*

He comes, the *herald* of a noisy world.—*Cowper.*

但し、同格語に說明せらるゝものが"let"の目的たる時、一致せざる事がある。例へば

Let *us* make a covenant, *I* and *thou*.—*Genesis*, xxi. 44.

これも亦 I and thou will make…の心の强烈なる反影である。

129. 補語*たる名詞、代名詞の事は旣に所々に傍說したる所であるが、次の如く一致する。

(1) 主格補語は其格主格にして主語と一致する。例へば

I am *he* of whom that man spoke.

Ye are *they*.

(2) 目的補語に於ては其格目的と一致して目的格である。例へば

* 此事は從來の文法の約束から言へば支配の法則の條下に說くべきものであるが、自分は少し考へる所ありて特にこゝに入れた。§138 參照。

I thought it *him*.

(3) 又目的格を主語とす特殊文句に於ては其述語 to be に對する補語は其の主語と一致して目的格である(§55 及び第二十二章、殊に §241 參照)。

I believed it to be *her*.

We suspected the intruders to be *them*.

130. "It is me." 上記の規則に依れば It is I でなくてはならぬ。又實際に於ても此の正式が古くは勿論、近代に於ても而も俗語の場合に於てすら用ひられて居る。例へば

It is *I*; be not afraid.—*Matthew*, xiv. 27.

If you want to know who did it—it was *I*.—*Stevenson.*

然れ共 It is *me* も現代の英語に於ては充分確定したる用法であつて It is I を正しとするの論法を以て It is me を非なりとするは不當である。Alford 氏は此の形につきて次の如く言つて居る。有益と思ふから引用する:"Grammarians (of the smaller order) protest: schoolmasters (of the lower kind) prohibit and chastise; but English men, women, and children go on saying it."

(*Queen's English*, p. 154)

偖、此用法の研究は興味あり又有益なるものと思ふから、今少しく其由來につきて研究して見たいと思ふ。元來此言方は古英語に於ては Ic hyt eom (=I it am)であつ

たので(上例 *Matthew*, xiv. 27 を 995 年譯の聖書で見ると分かる)、丁度今日の獨逸語の Ich bin es (=I am it) と酷似てし居る。Lounsbury 氏に依れば今日の獨逸語と全然同一の Ic eom hit も用ひられたとの事である。それが降りてChaucer の時代には It am I となて居る。例へば

It am I, fader, that in the salt see (=sea)

*Was put allone and dampned for to dye.

即ち、古き昔より此頃までは語の配置如何に拘はらず "it" は補語の地位にあつたもので It is he や It is she (Canterbury Tales, B. 1054 等に其例がある。尙上例は同 B. 1109 である) の is は he, she と一致して is であつたので It に對する一致でなかつたのである。然るにそれが時々 It と一致した如くに思はれ茲に It is I の濫觴を見るに至つたのであらう。其意味に於て自分は次の例を面白く思はざるを得ない。

It is not he that slew the man, *hit is I.*

—*Gesta Romanorum* (*cir.* A.D 1440).

兎も角十五世紀頃よりは It is I が定形となつた。例へば

It was I myself that cam† in the likeness.—*Malory.*

It was I that did offende.—*Roister Doister.*

* = Was put alone and condemned to die.

† cam = came

次に斯くの如くにして成立せし It is *I* が It is *me* に變ぜしは何時頃よりであるかと云ふに、其萠芽は十六世紀にあるらしい。一體其頃は人稱代名詞の主格の形が目的格の形に壓迫せらゝ傾向が激成せられた時代で、今日吾人が you を用ひて ye を用ひないのは其の遺跡である。尤この事は It is I を It is me に變じた原因ではないが、然も此變遷に加勢する所がなかつたとも言へぬであらう。而して此變遷を起した原動力は何であつたかと云ふに、それは諸家の說の一定せざる所である。曰く

(1) 通常動詞の次に來るものは目的格である (He saw *me*, Tell *me* の如く)。故に其類推よりして此形を生じた。I は動詞の主たる形で動詞を離せば me となるのである (Sweet 氏)

(2) 目的格が主格を壓迫しつゝある間に佛蘭西語の c'est moi が影響して此勢を成した (Lounsbury 氏)

(3) he, she, we との音の類似より來た (Jespersen, Onions, の諸家)

(4) 强勢のために me が I に代つた (Einenkel 氏)

凡そ言語の變遷をなすや、必ずしも一因の招來する所ではない。否多くの場合に於ては諸種の事情の綜合せられて變遷し行くものである。故に此等諸家の說は或は何れも一面宛の眞理を傳へて居るのかも知れない。又 Jes-

persen 氏は此問題を論ずるに當り數世紀の昔氏の 母語 (Danish) にて Det er *jeg* (=It is I) と云ひしに今日にては Det er *mig* (=It is me) と言ふと云ふ事を指摘せられた。成程丁抹譯の聖書を檢すると、前記馬太傳十四章二十七節にも det er *mig* とある(瑞典譯には det är *jag*. 獨逸譯には例の *Ich* bin es. 佛蘭西譯は無論 c'est *moi* とある)。して見れば I→me の如き現象は啻に英語に於けるのみならず、佛蘭西語に moi を生じた(十五世紀までは c'est *il* など主格の例ありとの事)のと同樣、丁抹語にもあつて、行々は立派な遊離格 (Case Absolute) を造るかも知れない。さすれば問題の關係範圍は著しく擴大せられて素より余等の論議し得べき性質のものではなくなる。乍然茲に余の思ふのは此 It is me は一番はじめには It is I の次に來る關係文句(Relative Clause)に於て關係代名詞が目的格たる時、"I" が其の關係代名詞の格の方に引付けられて*(若しくは此關係文句は言表はされずも意味に於て同樣ならば精神的に引付けられて) "me" とな

* 或一つのものが外のものに引付けらるゝ事所謂 Attraction が如何に言語の變化を來すに有力なるものかと云ふ事は本書に於ても所々に說いた。先行詞が關係代名詞の方に引付けられる例も決して少なくはない。例へば

(Shakespeare) When *him* we serve's away=When *he whom* we serve is away.

(Brontë) To how many maimed and mourning millions is the first and sole angel visitant, *him* (=he whom) Easterns call Azrael.

る形より起つて來たのではなからうかと云ふ事是である*。即ち

It was *me that* (*whom*) you struck.

が此一般廣く用ひらるゝ It is me の先驅であり、其 me は struck の目的たる關係代名詞 whom 又は其心持に引付けられて出來たものではなからうか。現に獨逸語では今尙ほ關係文句の有無に拘はらず、又その關係文句の性質如何に拘はらず、更らに換言すれば關係代名詞の格の如何に關はらず *Ich* bin es を用ひて居る。例へば

Ich bin es, *den* Sie geschlagen haben.

Ich bin es, *der* Sie geschlagen hat.

兎に角 It is+目的格の現はれ初めた十六世紀頃の例を見ると、余の見た範圍內に於ては如上の場合ばかりである。例へば

Is it *him* you speak?—*Marlowe*.

'Tis not thy wealth, but *her* that I esteem.—*ibid.*

'Tis *her* I so admire.—*Fletcher*.

It was not *me* you followed.—*Wycherley*.

それから降りて

It is not *me* you are in love with.—*Addison*.

* もう一つ It is..that (接續詞)..の形で以て副詞的のものゝ意味を强むる形も或は多少の與かる所があつたではなからうかと思ふ。

If you are sure it's *me* you want, I am ready to accompany you.—*Dickens.*

It's not *me* I'm anxious about.—*Thackeray.*

斯の如くにして用ひられ來りたる It is の次の目的格は（殊に me に於て著しく）他の關係、卽ちそれを引付くる目的格のなき場合にすら用ひらるゝに至つた。其何故に me に於てのみ此用法が多いかと言ふ事は前記諸家の說明が說く事であらう。兎に角十八世紀に至りては次の如き例がある。

If ever there was a rogue in the world, it is *me.*

—*Richardson.*

Were it *me*, I'd show him the difference.--*ibid.*

而して此形に最高の權威を與へたものは恐らく詩人 Shelley であらう。

Be thou, Spirit fierce
My spirit! be thou *me*, impetuous one!

—*Ode to the West Wind.*

第十一章 一致の法則—(其三)

131. 凡て代名詞が先行詞を有する時はその先行詞と人稱、數、及び性に於て一致すべきものである。但し所謂人稱代名詞を除きては此等の區別を示す形態上の變化が

極めて少ない。先づ關係代名詞につきて見れば生物名詞を受くる who と無生物名詞を代表する *which 等の別と格の變化こそあれ、人稱、數、性の變化區別等は更に無い。故に先行詞に依りて、一致したるものと認定して他の文法關係を決するに止まる。次に指示代名詞に於ては this, these, that, those の變化がある許りで其外には one, ones, another, others がある位で名詞と代名詞との一致に關しては殆んど取立てて言ふ程の事もないのである。故に玆に注意すべき事實としては次の三項位で充分であらう。

132. 大體數の一致に關しては第八章に述べた所と同樣なるは言ふ迄もない。卽ち主語として單數の述語を採る樣のものは單數の代名詞を以て代表せられ、主語として複數の述語を要求する樣のもは複數の代名詞を以て代表せらるゝのである。故に玆に多く言ふ事は止めて只 any one (-body), each (……), every one (-body), some one (-body), no one (-body)等と either (……), neither (……) が屢々複數の代名詞を以て受けらるゝ事實（§§ 106-8 參照）を指摘して置く。例へば

Let *each* esteem others better than *themselves.*

—*Philippians*, ii. 3.

元々此用法は each 等が男女の區別なく兩性に通ずる時、

* 尤も古くは此 which を生物、人にも用ひた。例へば
Then Warwick disannuls great John of Gaunt,
Which did subdue the greatest part of Spain.—*Shakespeare.*

それに對して適當なる代名詞(佛蘭西語の soi, son の如き)なきより起つたものである。卽ち上例の場合 himself を用ふるも物足らず、herself では更らに面白からず、さりとて時々用ひらるゝ如く himself or herself とするは餘りに冗長に失して意義の徹底力を害ふよりかく複數を借用したる便法*であつて蓋し已を得ないものと云ふべきである。尙例を擧ぐれば

Nobody knows what it is to lose a friend till *they* have lost him.—*Fielding*.

Anybody else who have only *themselves* in view.
—*Richardson*.

Everyone must judge of *their* own feelings.—*Byron*.

No one in *their* senses could doubt.—*Dickens*.

前にも述べた通りかゝる場合には男女兩方の代名詞を竝べ or を以て結ぶ事もある。例へば

Each one made *his or her* comment.—*Miss Mulock*.

無論此法は理論上正しいけれ共口調面白からず、時には上記の如く複數を借用する事は實際避け難き事と思はれる。尙 parent, person の如き語に於ても同樣の現象を見る。例へば

* 故に次の如き場合は問題にならぬ。
England expects that *every man* will do *his* duty.
Every mother should suckle *her* own child.
Every tree is known by *his* (=its 古い頃の中性の屬格) own fruit.
—*Luke*, vi. 44.

The feelings of the *parent* upon committing the cherished object of *their* cares and affections to the stormy sea of life.—*S. Ferrier*.

A *person* can't help *their* birth.—*Thackeray*.

又今日文法では one は必ず one, one's 等で受けなくてはならぬ事になつて居るけれ共、それすら時に複數で受けてある事があるがそれ等は何れも性の問題に對する言語自身の苦心の跡を物語るものと考へられる。次の例に最もよく此間の消息を傳へて居る。

If an ox gore *a man or a woman*, that *they* die: then the ox shall be surely stoned.—*Exodus*, xxi. 28.

133. Either, Neither. 此語は普通の規則では單數と定められて居るが事實は屢々複數に取扱はれて居る。殊に either は each of two 卽ち結局の所 both として、歷史的根據も有して居るらしい。少くとも古往今來其の義に用ひられたる經歷は吾々にも明かである(例へば *John*, xix. 18 の如く)。又 neither は其の打消しである(歷史的には分岐點がある)ので且意義に於ては甲乙兩方を打消す點に於て both の打消であるものから複數に用ひらるゝも不思議はないと思はれる。例へば

When *either party* fix *their* attachment upon the substantial comforts of a rental, or a jointure, *they* can-

not be disappointed in the acquisition.—*Scott.*

Both are astonished at the falling off in the other one, but *neither* sees *their* own change.—*J. K. Jerome.*

134. 近世英語の名詞の性は凡そその表はすもの自然の性に依るを以て他の國語に於て見るが如き困難を見ない。然れ共次の如き事のあるは知つて置かねばならぬ。

(1) 人と雖も男女の別を考慮の外に置きて一箇の問題の單位としたる時は中性とする。例へば

He also reminded me of *somebody* else, but at the time I could not remember who *it* was.

—*H. R. Haggard.*

baby, child 等に對し屢中性を用ふるのも同樣と考へて差支へない。例へば

A *baby* cries when *it* is hungry.

The *child* is asleep : let *it* sleep on.

但し此の如き場合男女を併せて一般的に言ふ時、男性を以て代用とする事も普通である。例へば

A *baby* should have one bath every day, and if strong *he* may have two.

(2) 動物中高等なるものは其雌雄を分ち其性に從ひて取扱ふ（下等動物は中性が普通）けれ共又中性を用ふる事もある。例へば

A mare with *her* (又は *its*) young.

尙動物の或種類を指す時、又は性を問題外に置く時、動物に某の性を假りに與へる事がある。其場合には雌雄何れが人類に密接なる關係を有するかに依りて決せらるゝ習慣である。例へば馬を男性にし牛を女性にするは此類である。又總じて勇敢、强力を以て顯はるゝ樣なものは男性を與へられ、優美、柔和なるものは女性を與へらるゝ習慣がある。例へば獅子、犬、鷹等を男性にし、猫、兎、鸚鵡等を女性にするは此類である。

(3) 無性物中船が女性に取扱はるゝは一般熟知の所である。蓋し一種の擬人法であつて乘者たる男子の伴侶たる心持を傳ふるに起因するのであらう。而して此用法は今日屢々 engine, train, motor-car, balloon, airship, aeroplane 等に適用せられて居る。例へば

As it was, the driver of the *taxi*.....sat down again in the saddle and proceeded to let *her* out a bit further.

—*Snaith.*

(4) 擬人法に依りて無性物に男性又は女性を與ふる事は文語殊に詩に於て極めて普通である。例へば

Nature from *her* seat

Sighing through all *her* works, gave signs of woe.

—*Milton.*

Time gently shakes *his* wings.—*Dryden.*

Thou who didst waken from *his* summer dreams
The blue *Mediterranean.*—*Shelley.*

Love is and was my lord and king,
And in *his* presence I attend.—*Tennyson.*

要之、强力、優勢、尊嚴なる樣のものは男性（Anger, Death, Despair, Fear, Summer, War, Winter 等）に、優美、溫雅、肥沃なるものは女性（the Earth, Hope, Mercy, Peace, Spring, Virtue, Wisdom 等）にする。the Sun（古英語では女性）を男性に the Moon（古英語では男性）を女性にするのも此類で、此擬人法の場合には餘程拉丁語の影響があるらしい。彼の國名に對して女性を用ふる等は拉丁語の文法の寫しである。

(5) 天體中希臘羅馬の神の名を有するものは其神の男女如何に依りて性を定める。例へば Jupiter（木星）, Mars（火星）, Mercury（水星）は男性、Venus（金星）, Vesta（Olbers 氏惑星）は女性とする類である。

第十二章 一致の法則——（其四）

135. 古英語に於ては形容詞は其の名詞と性、數、格の三點に於て一致したもので、その屈折は拉丁語等に於

けると同樣に可なり複雜なるものであつたが漸次その變化が失はれ Norman Conquest 以後益々甚だしく Chaucer には僅かに數の變化を止むるのみである（尙別に定變化、不定變化と云ふものがあるが今日の問題には關係がない）。降りて近世英語となると其の變化も失はれて、今日一致法に關して注意すべき場合としては this, these; that, those があつて其の修飾する名詞と數に於て一致する許りである。此等は最早や說明を要しない事である故一切を省き、玆には注意すべき二つの事實に關して說明を加へて置く。

136. **"These kind of knaves."** これは Shakespeare の King Lear, II. ii. 107 にある例で、狹量なる文法家の排斥する所であるが今日でも可なり盛に用ひられ、充分の歷史をも有し、又合理的な言方で、一寸見て形式が備はらないからとて否認すべき性質のものでない。先づ近世の例を少し擧げる。

My friend Will Honeycomb is one of *those sort of men* who are very often absent in coversation.—*Addison.*

It is certainly an unpleasant thing to have *those kind of yearly drains* on one's income.—*Jane Austen.*

I can't bear *these kind of things.*—*Trollope.*

What! a bourgeois,—a tradesman? with no more

money than *those sort of people* usually have.

—*Miss Mulock.*

I hoped we had done with *these sort of things.—ibid.*

Those sort of writers would merely take it as a first-class advertisement.—*Corelli.*

偖、何故に此言方が是認せらるべきものかと云ふに、それは此形を用ふる人の心の中に最も重要なる地位を占むるものは "these knaves" であつて kind of はその knaves に對する一種の形容詞的附屬物に過ぎないからである。此事を證するに足る例は此項の末に擧げるが、尙ほ此の點に關しては kind of (屢々略して kind o', kinder), sort of (同樣に sort o', sorter) が俗語に於て副詞的に (=somewhat, rather) 形容詞や動詞を修飾するのに隨分廣く用ひられて居る顯著なる現象* を參照せば思半に過ぐるものがあらう。次に古く溯りて古英語を探ねると、斯の如き場合 kind は屬格に立ちて全く形容詞の用† をなしたものである。例へば *ānes cynnes* wite (=*one kind* punishment=punishment *of one kind*), alle *kunnes* sunnen (=*all kind* sins=sins *of all kinds*) と云ふ樣な有樣

* 例へば You'll *kind of* want to get ashore.—*Stevenson.*
I am *sort o'* hurt.—*Thackeray.*

† § 40 (3) 參照。

で、今日普通 a kind of grass と云ふ所をば a kind grass (kind を屬格として卽ち=grass *of a kind*) と言つたので吾人が謂ふ「一種の草」と一致したものである。一體現今の英語には有形の言方より無形の言方に移つた事が多いのであるか實際「草の一種」よりは「一種の草」の方が吾人の腦中に浮ぶ觀念の卒直なる言表はし方である。兎も角古英語に於ては上記の通りであつたが、後年代を經るにつれて一般の名詞が格の變化も影淡くなり cynnes, kunnes 等の屬格語尾も失はれ中古英語に於ては大方 *kin* 又は類似の形で、然かも矢張形容詞的に名詞の前に現はれて居る。例へば Chaucer の Canterbury Tales, B. 1137 にある

Som kin affray (=terror *of some kind*)

の如き卽ち是れである (Chaucer の House of Fame, 1530 に alles kinnes condiciouns = conditions of all kinds と云ふ古英語其儘の例もあるが Chaucer には珍らしき例である)。而して此中古の言方、卽ち kind を變化せずに名詞の前に形容詞的に冠する言方は今日尙ほ蘇格蘭地方に其跡を留めて居て

What kind conduct's that?

など云ふ事は屢々耳にする所である。

然るに一方中古英語の時代には佛蘭西語から maner

(今の manière) が輸入せられて kind の代をなし一時非常なる勢力を示し Chaucer にも所々に用ひてある。例へば *a maner song; what maner man; other maner pley (=play); no maner chaunce (=chance) 等があり、降りて Spenser にも all manner wights† (=men) があり、聖書にも

.....and *all manner vessels* of ivory, and *all manner vessels* of most precious wood.....

—*Revelation*, xviii. 12.

と云ふ例が見える。然し manner をかくの如く名詞の前に直ぐ用ふる事は久しく續かず、十六世紀頃には最早大抵は佛蘭西語の manière *de* に倣ひて manner *of* とした。聖書でも上記の一例の外は委く of が入れてある。‡

例へば

Two manner *of* people.—*Genesis*, xxv. 23.

而して此 manner of と云ふ言方は、逆に如上の歴史を有する kind の用法にも影響を及ぼして其 kind の次に of を入るゝに至つて、玆に上に言つた「一種の草」の代りに「草の一種」と云ふ様な言方が出來たので今日では that kind

* 順々に M. P. III. 471; M. P. II. 24; Canterbury Tales C. 627; G. 527.

† Faerie Queene, IV. x. vii.

‡ Tynadle の聖書にも既に all maner of sicknesses and all maner off deseases (*Matthew*, x, 1.) 等がある(序に曰ふ、of, off は共に正しいのである)。

of things と things of that kind との二様の言方が對立して居るのである。さは云へ此項の初めに示した言方に於ては矢張古い言方に於ける様な心持を持續して居るので kind of, sort of は腦裡に於て第二の地位を占め these, those は先の名詞 knaves, things 等と一致して居るのである。次の例を主觀的に考察せば其邊の消息が分かるであらう。

Know ye not, master, to some kind of *men*
Their graces serve *them* but as enemies?

—*Shakespeare.*

Wherein *were* all manner of four-footed *beasts.*

—*Acts*, x. 12.

137. "This nineteen years." これも Shakespeare にある句である。今日は比較的少ない言方だと思ふがそれでも全く用ひられないではない。例へば

I thought you had been dead *this thirty years.*

—*Doyle.*

これが少し古い書物になると非常に多い。例へば

this three year.*—*Malory.*

this hundred year.—*Lord Berners.*

* 此語は昔は複數も year であつた。今日でも俗語には殘つて居る。例へば The horse is ten *year* old.

this many summers.—*Shakespeare.*

そして此等は一般に nineteen years 等いふ年月を一箇の連續したる不可分のものとして說明 (§ 110) せばそれでよろしいとせられて居るが、事に依れば中古後期の this の複數 thise の遺跡ではなからうかとも思はれる。* 何れにしても吾人普通の目的には支障はない。只この樣な事實がある事を知つて居ればよろしからう。其から尙 Shakespeare にも these forty hours; these many years 等もある。

〔注意〕一致の法則を說くには上記の外もう一つ大切な動詞の時の一致と云ふ事をも言はねばならぬ。併し此事は重複文殊に其の名詞文句を有する文と目的の文句を有する文に於て著しき事であるから後章 (§ 159 及 § 104 等參照) に讓る事とした。

第十三章　支配の法則及び其反例

138. 支配 (Government) の法則とは文中の或語がそれに附隨すべき名詞の格を指定する法則である。故に前にも斷つた通り § 129 に說きし事も文法の習慣から言へば本章の領域に屬する。一體古英語に於ては此支配の關係が極めて複雜で或動詞は其次に目的格を指定して

* 但し近くはかう云ふ例も多くある：I may live *another fifty years.*
—*H.R. Haggard.*

之れを支配し、或動詞は屬格を支配し、或動詞は與格を採ると云ふ樣な有樣であつた。又前置詞にしても某々の前置詞は某々の格を要求し、又同一の前置詞と雖も其場合の意味如何に依りて其支配する格を異にした事もある。故に支配の法則なるものは極めて重要なものであつたが、今日の英語に於ては格の變化が無くなつたと同時に他の理由も加はりて、昔の法則なるものは殆んど全部廢棄せられ僅かに次の數則を保有する許りである。

(1) 仕懸の態の他動詞は目的格の名詞又は代名詞を支配する。但し本書に於ては間接目的及び反照目的が與格なる事を保留する (§§ 32, 41-2, 45, 49 參照)。

(2) 凡ての前置詞は目的格の名詞又は代名詞を支配する。

(3) 形容詞 like 及 near は與格の名詞又は代名詞を支配する。

尤もこれに言ふ目的格 (Accusative Case) と與格 (Dative Case) とは今日に於ては全然形態上の區別なく、通常兩者を纏めて Objective Case と稱して居る事を思はゞ、如何に今日の英語に於ける支配法なるものが單一にして殆んど說明を要せざるかを知るであらう。故に茲には今日普通に行はるゝ反例のみを列擧し特別の注意を促

すに止める。

139. (1) 疑問代名詞 whom が動詞又は前置詞の目的たるべき時、其の目的が文頭に立つの故を以て屢々主格 who が用ひらる。例へば

Who can he mean by that?—*Sheridan.*

Who does this dreadful place belong to?

—*Mrs. Humphrey Ward.*

I was going downstairs, when *who* should I meet but Betty's second cousin?—*Mrs. Gaskell.*

Without knowing *who* to pay it to.—*Hardy.*

更らに甚だしきは § 91 (1) に說きし如く疑問文を省略したる場合、口語に於ては專ら此法が用ひらるゝ事である。例へば

Ah, but I was recommended to you.

Who by?—*Doyle.*

(2) 關係代名詞 whom が目的たるべき時、その目的が從文の先頭に立つを以て、屢々 who が誤用せられる。例へば

The remaining place was engaged by a gentleman *who* they were to take up on the road.—*Thackeray.*

(3) 動詞又は前置詞が二箇以上の目的を有する時、その遠き方の目的は屢々主格に立つ。例へば

All debts are cleared between you and *I.*

—*Shakespeare.*

And now, my dear, let* you and *I* say a few words about this unfortunate affair.—*Trollope.*

Leave Nell and *I* to toil and work.—*Dickens.*

Rather than I would see her thy wedded wife and *thou* her loving lord.—*H. R. Haggard.*

(4) 時には目的格なるべきものが、次に主格の關係代名詞の來るため其方に引付けられて、主格に立つ事がある。例へば

The encouraging word of *he* that led in the front.

—*Bunyan.*

Let* *he* who made thee answer that.—*Byron.*

これは極めて重要なる現象の一ッであつて言語の變遷の一大原動力となる。§ 130 の說明及び其脚註と對照せば蓋し思半に過ぐるものがあるであらう。

(5) 動詞又は前置詞とその目的なるものとの間に思想の變化する文句の入り來る時、目的がその思想の方に引かされて主格の誤用を見る事がある。例へば

My son is going to be married to I don't know *who.*

—*Goldsmith.*

* 尤も "let" の次に主格を用ふる事は今日和蘭語に於ても之れを見る。例へば Lat *ik* nu toonen (=let I now show).

(6) 上例4の場合に似て次の如き文もよく見る所である。

Thus *he* that overruled I overswayed.—*Shakespeare*

これも矢張り一つには形容文句の方に引かさるゝ樣でもあるが、最大原因としては、言者初めに腦裡に描く所の思想中最も主要なる地位を占むるものを先づ初めに問題の中心點として提出するに依り、たまたまそのものが全文に於て目的の地位にある時かゝる反例を生ずるのである。尙次の如き文に於ては思想中主要なるものを先づ初じめに提出したるまゝに止めず後よりそれを代表する代名詞を用ひて居るのでかくの如き反例を免がれて居るが、此と彼とを比較研究せば上掲反例の由來する心的原因が自から明白とならう。

Your majesty and we that have free souls, it touches *us* not.—*Shakespeare.*

He that can discern the loveliness of things, we call *him* Poet.—*Carlyle.*

一體此の後の例の如き文は文法に於ては攻擊せらるゝ文である。成る程先に "He" と言つて後に "him" と言ふは一ッいらぬものが入つて居るわけである。然し吾人は斯の如き文に對しては二ッの事を知つて居なければならぬ。一ッは斯の如き文は言者の腦裡に映ずる想の最も自

然的なる言表はし方で、文法的な We call him who…… Poet と云ふのは却つて不自然なる言方である。從つて文法上宜しとする文は時に甚だしく描想の力を損ずるものであると云ふ事、それからもう一ッは英語の昔に於ては斯の如き自然な言方卽ち思想の寫眞とも言ふべき文が多く用ひられたと云ふ事之である。故に現代の文法に於て必要とする構文は云はゞ修正を加へたる寫眞に比すべきもので、時と場合に依りては、此の修正加工を排して眞の寫眞を採る必要もあるので上記の如き文も一概に排擊すべからざるものである。然し乍ら此項最初に揭げし文の如きは此思想の寫眞より修正に至る中間に位し寫眞としても眞ならず、修正としても全からず、宜しく何れの場合にも避けねばならぬ。

140. But, Except, Save の次に於ては目的格なるべきものが屢々主格になつて居る。例へば

(1) My father had no child, but *I*.—*Shakespeare.*

Earth had swallowed all my hopes but *she*.—*ibid.*

これ等は but *me*, but *her* でなくてはならぬ。然し乍ら玆に注意すべきは此 but と云ふ語は前置詞でもあるが又接續詞でもあるから次の如きは其の方よりして是認せられ得る。

Never man shall have that office but *he* while he

and I live.—*Malory.*

即ち此 but を接續詞と見れば he shall have that office の省略體として辯護が出來るのである（然し上記沙翁の例に於ては but を接續詞と見ても矢張誤である）。殊にbut を Never man の次に置きたる時に於ては近代の英語に於ては but he の方が妥當なりとせられて居るらしい。即ち次の二文は意味は同樣であるが一は but を前置詞として him を支配させ、一は but を從屬接續詞(=except that) として其從文を省略せる體となつて居るので兩方共に正しいのである。*

No one would have thought of it *but him.*

No one *but he* would have thought of it.

尙此 but he の例を擧げると

The boy stood on the burning deck,

Whence all *but he* had fled.—*Mrs. Hemans.*

それから從屬接續詞として but を上記の如くに用ふるはその後に形容文句を伴ふ場合に殊に多い。例へば

Every one can master a grief *but he that* hath it.

—*Shakespeare.*

No one hath ascended up to heaven, *but he that* came down from heaven.—*John*, iii. 13.

* Kein Gott ist *ohne ich* (=There is no God *but I*).—*Luther* 參照。

但しもう一ツ批評眼を以て見れば此は前節 (4) に該當する例であるかも知れないのである。只 but と云ふ語の有する兩面性が此等の文に幸して吾人をしてその辯護者たるを拒む能はざらしむるのである。

斯の如く but を有する構文に於ては次に主格を用ふるも正しとすべき場合が多いが、此項最初に掲げし二文の如きは絕對に是認の餘地を存せないから能く注意して避くべきである。

(2) 次に except は古くは unless の義にて接續詞に用ひられた（§218,7參照、*John* iii. 3 等 Bible には例が多い）が今は前置詞としてより用ひない。故に目的格を採らねばならぬ。例へば

Perhaps any woman would, except *me.*

—*Thomas Hardy.*

然も次の如き反例も決して少なくはない。

And everybody is to know him except *I*?

—*George Meredith.*

(3) 又 save は今日は前二者比すれば用ふる事が少ない樣に思はれるが、用ふる場合には前置詞として目的格を支配さす方が近代的用法と云ふべきである。例へば

All were gone save *him*, who now kept guard.

—*Rogers.*

但し主格を伴ふ場合もある。例へば

Who shall weep above your universal grave save *I*?
—*Byron.*

元來此の save は 間々想像せらるゝ如く動詞の命令法でなく、佛蘭西語の sauf から中古時代に英語の中に入つたもので Chaucer 等にも sauf となつて居る。原意は safe（形容詞）で拉丁語の salvo（例へば熟語の *salvo jure* に於けるが如く）の寫しである。故に主格を伴ふのが當然其の古き用法で其構造は遊離文句（Absolute Clause 第二十一章參照）である。實際 Shakespeare あたりまではどうしても主格を用ひた例の方が多く、其場合には save は此項の but he 等の but と同樣に接續詞として說明するが宜しい。而して今日でも save は其次に目的格を伴はなければならぬと斷然主張する丈の根據はない。然し概して言はば but や except 程には用ひられない（自分の知る所では Doyle が最も好んで此語を前置詞として用ふる當代の文人らしい）。

141. Like.* §138 (3) に記述した通り此語の次には與格卽ち目的格と同形のものが來るべきである。然し其意義が as と類似して居る所から（此の語につきては

* 尙 like, near 等には時々其次に to, unto 等を見る事がある。根本から言へばそれは與格の變化が失はれたる後に於ける代用に過ぎないと見て差支へない。併し多少意義に强勢はあらう。

次節 (3) 參照、尙一層くわしくは §231 (1) 參照）屢々主格を用ひたる誤例を見る。例へば

Yes, if it was a sweet young girl.....and not one like *I*.—*R. Wintle.*

更らに次の如く like の後に文句を用ひたる例も多く殊に今日の口語に於ては一般普通である。

Why can't he read the Times, *like other men do*, in the morning?—*G. R. Sims.*

142. 本章に說くべき事は前節にて終つたので本節及び次節は實は別の事柄に屬する。が別に章を設けて說く程の必要もなく、且又一方から言へば對照上便宜に感ぜらるゝ點もあるから假に玆に入れたのである。それは文法上は主格を用ふる筈の所に目的格の用らるゝ著しき場合の列擧と其解說とである。元來二人稱複數の代名詞は ye であつたのが十六世紀に於ける代名詞の大混亂の際目的格を其代りに用ひしが（反對に you の代に ye を用ひし例もあるが比較的少ない）其まゝ今日の如く固定したのである。又 Quaker 宗の人々の間には今日尙二人稱單數が日常用ひられて居るが、普通には thou を用ひずして thee が多く用ひられて居る事は例へば John Halifax, Gentleman 等の讀者の熟知の事である。但し吾人が今玆に考査せんとするのはかゝる一般的の現象にあらずし

て、文の構造上の關係よりして主格の代りに目的格が誤用せられ、若しくは代用せらるゝ場合をのみ述べたいと云ふのである。それには先づ次の三ッの場合を知らねばならぬ。

(1) 關係代名詞が who なるべきに所屬達の語に引かされて whom となる事がある。例へば

One *whom* all the world knew was so wronged and unhappy.—*Miss Mulock.*

The same affinity will exert its energy on *whom*-soever is as noble as these men.—*Emerson.*

第一の文の whom は knew に引かされたもの、第二の文の whomsoever は on に引かされた誤たるは論を俟たない（此點に關しては §139 (2) 對照、§181 參照）。

(2) 疑問代名詞が who なるべきに所屬達の語に引かされて whom となる事がある。例へば

Tiribasus……asked me *whom* I thought would overcome.—*Beaumont and Fletcher.*

Some one was close behind, I knew not *whom.*
—*Stevenson.*

第一の文の whom は thought に、第二の文の whom は knew に引かされた誤用である（此點に關しては §139 (5) 對照）。

(3) 接續詞 than, as の次に主格なるべきものが目的格となりて現はるゝ事は殊に多き誤である*。

例へば

But there, I think, Lindore would be more eloquent than *me.*—*S. Ferrier.*

She was neither better bred nor wiser than you or *me.*—*Thackeray.*

The Carbottle people were quite as badly off as *us.*
—*Trollope.*

The nations not so blest as *thee*
Must in their turn to tyrants fall.—*Thomson.*

斯の如き誤用は語の省略に其起因を有し、主として次の如き兩樣の場合の混同より來るものとせられる。即ち

He is taller than I (am) の場合と

That matter concerns you more than (it concerns) me の場合、及び

He is as tall as I (am) の場合と

That matter concerns you as much as (it concerns) me の場合との混同が

上記の如き一般の誤用の基である。既に than, as を以て比較するものは上記の如き二つの場合あるを知らば、述語に他動詞を有する次の如き二組四樣の文は文

* 但し此點に關しては更らに次節を參照。

法上何れも正しく而も意味する所は全く相異なるものたるは明かである。

Father likes you better than *I*.
Father likes you better than *me*.

Father likes you as well as *I*.
Father likes you as well as *me*.

即ち此等の文は一つ宛一箇の確實なる意義を有し各明瞭なる思想を傳ふるものである。然し乍ら上述の如き混亂の廣く行はるゝ今日に於ては前後の關係上事情の自から判明する樣なる場合の外は、普通一般の場合に於ても文の一部を補塡するか若しくは他の構文を用ふる方が安全である。例へば

Father loves you better than he loves me.

Father loves me, but he loves you better.

等とする。殊に次の如き文はそれ自身丈けに於ては意義全く不明たるを免かれない。

John loves James better than Frank.

143. Than につきての**特例.** 多くの文法家は than の接續詞たる事を主張して絶對にその前置詞たる事を許さない。實際此語が自由自在に前置詞とし働くと前節に說明したる如き他動詞を述語とする場合には誠に困つた事柄を惹起する。故にかゝる場合に於ては願はくはどこ

までも than を接續詞の檻の中に入れて置きたい。然し乍らかゝる不都合を釀さゞる範圍に於ては than は前置詞たるべからずと主張する謂はれはない。而して現に或る一ッの場合に於ては規則的に前置詞となつて居るのである。それは關係代名詞が比較の相手たる場合で than *whom* が固定した用法で than who と言ふ事はないのである。例へば

Dr. Adam Smith, *than whom* few were better judges on this subject, once observed to me.....*Boswell*.

Beelzebub.....*than whom* none higher sat.—*Milton*.

A domineering pedant o'er the boy,

Than whom no mortal so magnificent!—*Shakespeare*.

尤も此 than whom はあまり頻繁に用ひらるゝ種類の言方ではない。than を前置詞と見る事の躊躇せられたのも前記の如き場合に因る事もあらうが一つは斯の如き場合が比較的に少ないからであらう。然し今後に於て其用法が益勢を得る時文法は此れを堰き止める理由を有しないのである。尙一つ知つて居つてよい事は than が前置詞としての經歷は決して新しきものでなく既に十五世紀より其例があり、聖書の中にも見らるゝと云ふ事である。例へば

For ther is nothyng more suspecte to evyl people *than them*, whom they know to be wyse and trewe (=true).—*Caxton.*

A stone is heavy, and the sand is weighty; but a fool's wrath is heavier *than them* both.

—*Proverbs*, xxvii. 3.

其他近代に於ては此用法が中々勢力がある。例へば

Thou hast been wiser all the while than *me*.

—*Southey.*

Such as have bound me, as well as others much better than *me*, by an inviolate attachment to him from that time forward.—*Burke.*

[附說] 同樣に as が擬前置詞となる場合も認めなければならぬ。但し than に比すれば歷史的根據が薄弱であると信ずる。His career as a soldier was brilliant 等であるが說明は §229 參照。

第十四章 受身の文

144. 前に既に說きし如く (§31) 第三公式の文卽ち一ツの目的を採る完全他動詞を述語とする文を受身の構造に更ひれば前文の目的が主語となり、前文の主語は變じて by の目的となり副詞句を構成する。例へば

Everybody likes him.	He is liked by everybody.
The bullet penetrated a tree.	A tree was penetrated by the bullet.
A stray arrow has wounded him.	He has been wounded by a stray arrow.

而して動作の行爲者が一般不定のものなるか、又は重要視せられざる場合には受身の文に by+目的格の句を用ひない。例へば

They call Japan the England of the Orient.	Japan is called the England of the Orient.
We speak English here.	English is spoken here.
What do you call this in English?	What is this called in English?
I saw your father there.	Your father was seen there.

She had never been bantered before.—*Conrad.*

It had never been even mentioned to him.

—*Mrs. Burnett.*

There is but one thing to do. It must be done at once.—*Doyle.*

[注意1] やゝ古き文には行爲者を表はすに of を用ひた。例へば

Then was Jesus let up *of* the spirit into the wilder-

ness to be tempted *of* the devil.—*Matthew*, iv. 1.

而して此用法は今日に於ても或場合には保存されて居る。例へば

……while bream, beloved *of* our ancestors, cannot be recommended highly.—*Clifford Cordley.*

(in *Chambers's Journal*, Febr. 1916)

又更らに古き頃には with の用ひられたる場合もあり from の用ひられたる事もあるが、例を擧げる程の必要もなからう。

[注意2] 完全他動詞は原則として受身の態を有する。然れ共中には受身の構造を許さゞるか又はあまり用ひざる場合もある。例へば

He escaped capture.

The boy resembled his father.

He did not survive the loss.

We must not tell a lie.

[注意3] 總じて受身の文に於ては行爲者はあまり重要視せられざるもので、且又動作の進行手續よりも、幾分その結果の方に心を移す樣の傾ありて、* 時には理論上受身なるべきものが其關係が輕視せらるゝ結果として自

* 然し乍ら同じ to be+過去分詞でも次の二ツの區別は明瞭に心得て置かなくてはならぬ。

The rain began to fall heavily, and every time a gust of wind struck us, we *were drenched* by it. (受身)

When the rain at last ceased, we *were drenched*. (結果なる狀態を意味し drenched は補語)。

動詞の如くに用ひらるゝ事がある。例へば

Still, I believe that we should *have drowned*, since here the water ran like a mill-race, had not the man upon the shore……stretched out his long stick towards us.—*H. R. Haggard.*

145. 自動詞を述語とする文は動詞の性質上受身の構造をゆるさないは當然である*。然れ共同族目的 (§33) を有する文は時々受身にせられる。例へば

They fought a good fight.	A good fight was fought.
They ran a race.	A race was run by them.

A blow was struck.—*Doyle.*

Many a battle has been fought in Hyde Park.

—*Geo. Borrow.*

146. 又自動詞の次に前置詞+目的なる副詞句が來る時、或る場合にはその前置詞と目的とが切り離されて動詞+前置詞が一箇の他動詞の如く見做され、元來前置詞の目的たるものが文の主語となりて受身の構造を見る場合が頗る多い。例へば

No one can rely on his words.	His words cannot *be relied on.*
We cannot approve of such a conduct.	Such a conduct cannot *be approved of.*

* 今日 to answer, to command, to thank 等は他動詞として扱つて居るが、元は自動詞であつて與格を支配したのが中古時代より轉化したのである。

He laughed at me.	I *was laughed at* by him.
The cart ran over a boy	A boy *was run over* by the cart.
They all listened to the old man.	The old man *was listened to* by them all.

此類の用法は非常に多く殆んど枚擧に遑あらずと言つて差支へがない。今其内幾分を擧げる

to account for	to hear of	to speak of
to act upon	to impose upon	to speak to
to adhere to	to inquire into	to stare at
to arrive at	to insist upon	to talk at
to ask for	to look after	to talk about
to attend to	to look for	to talk of
to call for	to look into	to tally with
to call on	to look upon	to tamper with
to deal with	to reason with	to think of
to despair of	to resort to	to touch upon
to dispose of	to seek after	to wait upon
to do with	to seek for	to wait for
to do without	to sigh for	to wonder at
etc.,	etc.	

例へば

The strange phenomenon *was* not *accounted for.*

This lock has *been tampered with.*

The difficult points of the affair *were* not *touched upon.*

To be left till *called for.*

She had in part suspected……my *being resorted to.*
—*Dickens.*

I am not going *to be trifled with.*—*Hardy.*

其他

His bed had not *been slept in.*—*Doyle.*

Now, to be properly enjoyed, a walking tour should *be gone upon* alone.—*Stevenson.*

This unconquered country was the Welsh kingdom of Strathclyde, and *was dwelt in* by the Celtic race.
—*Stopford Brooke.*

147. 又前項の如き動詞に副詞の添ふ時、動詞＋副詞＋前置詞が纏まりて一箇の他動詞の如く見做され、元來前置詞の目的たるものが主語となりて受身の構造を見る事がある。例へば

Let us do away with all ceremony.	Let all ceremony *be done away with.*
I cannot put up with him.	He cannot *be put up with.*

The desire of her bosom was *to be run away with* in person.—*Meredith.*

Everything can *be got out of* in this world.
—*Mrs. Humphrey Ward.*

148. 又§146と形相似て而かも文法上全く異なりたるは **他動詞＋副詞** が熟語をなす場合である。例へば

They took up the cause with enthusiasm.	The cause *was taken up* with enthusiasm.
They put me up for the night.	I *was put up* for the night.

But now the fence *was broken down*—the support *was snatched away.*—*G. Eliot.*

About ten days ago I *was called in* to see Mr. Holly.
—*H. R. Haggard.*

即ち此等の副詞は前々項の前置詞とは異なり、受身の文に於ても文法上は動詞と引離して解剖する事が出來る。熟語を成す場合尚且斯の如くであるから熟語を構成せざる副詞の場合、副詞は全然別々に取扱はるべきものたるは當然である。されば副詞の代りに前置詞＋目的なる副詞句のある場合も副詞句は副詞句として動詞と別々に解釋せらるゝが當り前である。例へば

We sent the servant *for the doctor.*	The servant was sent *for the doctor.*
He robbed me *of my purse.*	I was robbed *of my purse.*
He has done me *out of ten pounds.*	I have been done *out of ten pounds.*

然るに茲に最も注意すべきは元來此と同様の文法的構造を有する文にして而も其取扱ひ方を異にし **他動詞＋目的＋前置詞** が纏まりて一箇の他動詞の如く見做され、其結果元來前置詞の目的たるものが文の主語となりて茲に又特殊の受身の構造を成す場合がある。例へば

No one can lose sight of that.	That cannot *be lost sight of.*
I do not like others to find fault with me.	I do not like *to be found fault with* by others.

此外此の類に屬する主要なるものは to catch sight of; to take hold of; to make use of; to make much of; to make little of 等である。又中には二様の受身の文を許すものもある。例へば

He paid no attention to me.	1. I *was paid no attention to* (by him). 2. No attention was paid to me (by him).

He took no notice of me.	1. I *was taken no notice of.*
	2. No notice was taken of me.
He took good care of the book.	1. The book *was taken good care of.*
	2. Good care was taken of the book.

而してかゝる場合、口語及び普通文に於ては (1) の方が (2) の方よりも廣く用ひられる。そして此用法は § 146 に說いた場合に比すれば非常に其領域が狹いがそれでも時々色々の文に應用せられる。一例を擧ぐれば

One could almost fancy the little maid had just *been said good-night to,* and left to dream childish dreams on her nursery pillow.—*Miss Mulock.*

149. 次に注意すべきは動詞の目的が **他動詞＋目的** の形を有する句なる場合である。例へば

Some one forgot *to shut the window.*

He attempted *to cross the ocean.*

の如きに於て forgot, attempted の目的は夫々其後につゞく句であつて其句自身は 他動詞＋目的 の形を有して居る。斯の如き場合には普通の法式に遵つて It を先頭に立てゝ

It was forgotten to shut the window.

It was attempted to cross the ocean.

の如き文を見るは當然であるが、又時には目的たる句中の動詞の目的卽ち window, ocean が主語となり、述語の動詞及び句中の動詞を兩つ乍ら受身にする法が行はれる。卽ち

The window *was forgotten to be shut.*

The ocean *was attempted to be crossed.*

となる。尙實例を擧ぐれば*

Some mystery in regard to her birth, *which,* she was well informed, *was* assiduously, though vainly, *endeavoured to be discovered.—Fanny Burney.*

Considerable support *was managed to be raised* for Waldemar.—*Carlyle.*

That first inquiry *is* not in this article *attempted to be resumed.—H. F. Wyatt.*

150. 又述語が to acknowledge, to believe, to say, to think 等にして其目的が文句なる時、例へば

They said that he was honest.

They admitted that he had made a mistake.

の如き文も次の如く二樣の方法に依りて受身の文となる。

(1) It was said that he was honest.

It was admitted that he had made a mistake.

* Cf:—In the universities Latin or French *was ordered to be used.* —*Morris* 丁抹語 Pakken *ønskes bragt* til mit kontor (=The parcel *is wished brought* to my office).

(2) He was said to be honest.

He was admitted to have made a mistake.

尙二三の例を擧ぐれば

(1) の例

It is admitted that the exercise of the imagination is most delightful.—*Shelley.*

It must be owned that Charles's life has points of some originality.—*Stevenson.*

(2) の例

Miss Arabella Wilmot was allowed by all (except my two daughters) to be completely pretty.

—*Goldsmith.*

He was generally believed to have been a pirate.

—*Lord Lytton.*

151. 第五公式の文 (§ 33) 卽ち作爲動詞 (§§ 54-5) を述語とする文を受身に更むれば其の初めに目的補語たりしものが主格補語として通常動詞の後に從ふ。例へば

They proclaimed William emperor.	William was proclaimed *emperor.*
We elected him president.	He was elected *president.*

又此場合補語が形容詞なる時、不定法の句なる時も同

様である。例へば

They thought him honest.	He was thought *honest.*
He asserted this to be true.	This was asserted by him *to be true.*

此最後の例の解說につきては § 55 參照。

152. 第四公式の文 (§ 32) 卽ち與格動詞 (§ 45) を述語とする文は旣說の通り屢々次の如く二樣の異なりたる受身の文とする事が出來る。

He gave me this book.	1. This book was given me by him. 2. I was given this book by him.
They offered him the post.	1. The post was offered (to) him. 2. He was offered the post.
Congress granted him a pension.	1. A pension was granted (to) him by Congress. 2. He was granted a pension by Congress.

此中第一の法式は凡ての歐州語に普通なるもので其使用の範圍は極めて廣いが、第二の形式に至りては或少數の例（希臘語は其内著しきものである）を除きては英語特有のものである。而して可なり廣く用ひられて居る。例へば

All *this I was told.—Swift.*

Be not denied access, stand at her doors.

—*Shakespeare.*

I am forbidden horse-exercise.—Thackeray.

然し乍ら此形は慣例に依りて充分に定まれる場合の外は成るべく避けて、用ひざる樣にする方がよろしい。例へば

A long letter was written to him.

は極めて素直なる言方であるが

He was written a long letter.

は頗る落付き惡しと言はねばならぬ。

然れ共茲に第二の形式のみ用ひらるゝ特例がある。それは直接目的が不定法句である場合（§ 47）で此の場合には直接目的が受身の文の主語に立つ事は出來ない。例へば

I taught him *to swim.*

の受身は He was taught to swim (by me).

でなくてはならぬ（此の場合には to swim の如きものが多少其の方向を示す心持が——§ 21 (1) 脚註、及び § 41 (1) a 脚註參照——人には氣付かれずとも言語其ものに殘存して居るものらしい）。

又時には此場合とは異なりて而かも第二の形式の方が普通に多く用ひらるゝものがないでもない。例へば

I was spared much trouble は

Much trouble was spared me よりも普通なるらしく*、又次の如きは特例中の特例である。

He was dismissed the service.

Industry would have been banished the Earth.

— *Richardson.*

A vast multitude were expelled the city.

—*H. R. Haggard.*

153. 歴史的觀察. 理論上受身の態の動詞の主語たるものは仕懸の態の動詞の直接目的たるもの卽ち目的格 (Accusative Case) の名詞又は名詞相當語であるべき筈で、間接目的卽ち與格 (Dative Case) の名詞又は名詞相當語が受身の文の主語たるは變則と言はねばならぬ。實際外の歐洲語に於てもかゝる受身の文をゆるすは前述の通り例外であり又英語自身に於ても此の珍らしき形式はやうやく中古時代に其端を發した丈で古英語には無かつたらしい。

然らば何故に斯の如き特殊の構文を見るに至つたかと

* 但 This danger, at any rate, is spared our brother.—*Thackeray.* This pain would have been spared him for long.—*Hardy.* の如きもある。

云ふに、一ッは英語が古くより與格と目的格との形態上の區別を失ひしによるでもあらうが、* 其最大原因は間接目的殊にそれが人稱代名詞たる時、その人稱代名詞に重きを置くか、若しくは聲調上の關係（一體古英語及び中古英語に於て目的の人稱代名詞は多く動詞より前に出たが）よりして此を文頭に立てしに因するものと思はれる。卽ち

He gave me a book　の受身の文は

A book was given me　であるが、古くは屢々

Me was given a book　としたので、

此文に於て主語は矢張り book である。只主語と述語とに轉倒あるは副詞的なる me（§ 41, 2 參照）を文頭に立てしための現象（§ 72, 2 參照）に過ぎない。例へば聖書の Anglo-Saxon 譯馬太傳二十八章十八節に

Me is geseald æl̄c anweald, on heofonan and on eorthan (=Me is given each authority...)†

の如きものである。然るに後此形は無人稱動詞の場合、例へば*Me* likes it ‡(=it is acceptable to me. it が主語 me は與格）が *I* like it に變つたり、If you please (=if it is

* もう一つ動詞 to ask や to teach が二箇の Accusative Case を採つた事（§ 46）も或は此新らしき發達を促したではなからうかと思はれるが別に證據はない。

† Cf: *To them* his heart, his love, his griefs *were given.—Goldsmith.*

‡ Shakespeare 等には此例もある。例へば The music *likes you* not.
—*T. G. of Ver.* IV. ii. 56.

agreeable to you で元は you が與格、主語が言表はされざるもので佛蘭西語の s'il vous plaît と同じ構造）の you が主語と見立てられて as *I* please 等が出來た如く Me is given の形が I am given の形に變じたものらしい。而して其 me→I の變化の起つた時代は明瞭に分からぬが中古時代にあつたらしいので 1460 年頃の Towneley Mysteries の中に次の如き例が見える。

*Alle my shepe are gone ; *I am not left one.*

154. 受身の文は上記の如く to be＋過去分詞を以て其述語の公式とするが、次の如きも、多少づつの差異こそあれ、夫々一種の受身の形式である。

(1) to become＋過去分詞

(2) to get＋過去分詞

(3) to have (又は to get)＋目的＋過去分詞

(1) to become＋過去分詞の形は今日のto be＋過去分詞の形に對して發始體の受身 (Incipient Passive) と稱する事が出來るので、或事の發始を意味する。例へば

The acts of such a man *become repeated* in the life and actions of others.—*Smiles.*

Nor his breath *became agitated.—Hawthorne.*

* = All my sheep are gone....

元來古英語に於ては受身の態は beon, wesan (共に to be) の外 weorthan (=to become) に過去分詞を添へて造られたもので中古時代までは此形も隨分多く行はれた。例へば

No creature withouten cristendom * *worth saved.*
—*Langland.*

然るに此 worth と云ふ語は英語には全く亡び†(獨逸語にては今日尙 werden が普通である) 其類意語たる to become に於て僅かに其餘光を見せて居るのである。

(2) to get+過去分詞、此も一種の發始體である。例へば

In Wales he had *got married.*—*Watts-Dunton.*

Most folk *get tired* of such work.—*Hughes.*

After a fortnight Lord Surbington *got bored* with Venice.—*Oscar Wilde.*

(3) to have (又は to get) +目的+過去分詞、此は使役相の受身 (Causative Passive) とも云ふべきもので俗語に於て殊に多く用ひられ「何々を何々される」の意味である。例へば

I *had* my watch *stolen.*

*=Christianity.

†此語は只次の如きに於てのみ (受身ならねど)餘喘を保つて居る。
Woe *worth* the chase, woe *worth* the day.—*Scott.*

He *had* a ticket *given* him.

He *got* his coat *soiled.*

I *got* my pocket *picked.*

又此形は其使役相の意味を充分に發揮する場合に用ひられては「何々を何々させる」の意になる。例へば

He *had* his shoes *mended.*

So I went first *to have* my wounds *dressed.*—*Doyle.*

[注意] to have+目的 + 過去分詞 は古くは他動詞の完了であつた (其時分自動詞の完了は to be+過去分詞で)。此事は又他日說き度いと思ふが一言申添へて置く。現今でも愛蘭に於ては其通りであるから。

第十五章 名詞文句

155. 名詞文句は既に §32 に略示した通り從屬文句の一にして名詞の用をなして重複文を構成し次の如き語を以て連結とする。

(1) 從屬接續詞 that, whether, if (=whether), 及び but (that 又は what). 例へば

I know *that you are honest.*

They asked me *whether I liked tennis.*

My friend asked me *if there would not be some danger in coming home late.*—*Addison.*

それから but 若しくは but that (時に but what) は to doubt の打消又は疑問に最も普通で、意味は that と變りはない。* 例へば

There can be no doubt *but that she was lovely.*

—*H. R. Haggard.*

Who doubted *but the catastrophe was over?*

(2) 疑問代名詞 who, which, what.† 例へば

We did not know *who the traveller was.*

Tell me *which is better.*

---

* 但次の如きに於ては but that は "that not" に當る。

Who knows *but that he may alter his mind?—Hardy.*

† 名詞文句の連結たる what は疑問代名詞で關係代名詞の what でない事を記憶して置かなくてはならぬ。後者は形容文句を作るもので名詞文句を作るものでない。然るに世間にはよく此兩者を混同して居る人があるがそれではいけない。次の二例を比較したら其間の區別がよく分からう。

He asked *what my name was.* (名詞文句)

He is not *what he used to be.* (=that which he used to be 形容文句

尤も場合によると what.....の文句が何れに屬するか不明なる事がある。例へば

I told him *what I had told you.*

の如き文は孤立して居る場合には何れとも分からぬ。これは現代英語の言はゞ缺點の一つで全く已むを得ない。これが拉丁語であると

(名詞文句) Dixi ei *quid* tibi *dixissem.*

(形容文句) Dixi ei *quod* tibi *dixeram.*

の別があつて文が孤立して居ても一目瞭然であつた。英語でも元はこれにやゝ似て名詞文句には叙想法が用ひられたので其用法は今日でも少しは殘存して居る (§ 157 參照)。尙此事がよく分かれば世間に流布されて居る多くの牽强附會の說 (§ 157 II. 參照) が無くなる筈であると思ふから一言添へて置く。

Everyone knows practically *what are the constituents of health or of virtue.—Newman.*

(3) 疑問形容詞 which, what. 例へば

The question was *which way was the shortest.*

I cannot see *what objection can justly be made to the practice.—Reynolds.*

(4) 疑問副詞 how, when, whence, where, whither, why. 例へば

I asked him *when he expected to start.*

Where you were I did not know.

How great his reputation was, is proved by the embassies sent to him.—*Coleridge.*

Thou canst not tell *whence it cometh,* and *whither it goeth.—John,* iii. 8.

但し以上の連結の內 that は屢々言表はされざる事がある。例へば

Do not think *the youth has no force,* because he cannot speak to you and me.—*Emerson.*

I told him *I did not know his mate Bill.—Stevenson.*

156. 名詞文句は文中にありて次の如き役を勤める。

(1) 文の主語たる役目、例へば

It is well said, in every sense, *that a man's religion*

is the chief fact with regard to him.—Carlyle.

That in education we should proceed from the simple to the complex is a truth which has always been to some extent acted on.—*Spencer.*

(2) 他動詞の直接目的たる役目、例へば

I never can go on with an address unless I feel, or know, *that my audience are either with me or against me;* and I would fain find out, at this instant, *whether you think* I am putting the motives of popular action too low.—*Ruskin.*

(3) 被保留目的たる役目、例へば

We are not told *that the right way is more rough and painful*; only *that it is narrow and not easy to find.*—*Lord Avebury.*

(4) 主格補語たる役目、例へば

The reason is—*that he allows his understanding to overrule his eyes.*—*De Quincey.*

(5) 前置詞の目的たる役目、例へば

In *that he died,* he died unto sin once: but in *that he liveth,* he liveth unto God.—*Romans,* vi. 10.

I could think of nothing save *that he was running a tunnel to some other building.*—*Doyle.*

I was entirely indifferent as to the results of the game, caring nothing at all as to *whether I had losses or gains.*—*Corelli.*

A letter of friendship should never be written save *when the spirit prompts.*—*Gissing.*

此内最初の例の如き構文は多くの副詞文句を造るものとなり、此點に於て吾人は副詞文句と名詞文句との關係を見る事が出來るのである（§ 200 及び § 202 參照）。又最後の例に於ける when 以下は元來の性質上副詞文句である（§ 190 參照）が丁度副詞や副詞句が名詞相當語句たる如く（例へば until *recently,* from *behind the house* 等、§ 38,5 參照）名詞相當の用に轉じたものである。

(6) 同格名詞たる役目、例へば

One fact is undoubted——*that the state of America has been kept in continual agitation.*—*Burke.*

元來 (1) に掲げたる Carlyle の文の如き、即ち主語の本體たる文句を文末に移し It を假の主語として文頭に立つる場合、及び次の如く It を假の目的として用ふる場合も、要するに此同格の場合に過ぎないのである。

We hear it seldom said *that ignorance is the mother*

of adversity.

又同格と見て差支へなき場合には、屢々次の如く先立つ名詞が他動詞的意義を含むものにして、其の次に來る文句が意味上其の名詞の目的たるものが多い。

Jeffreys had obtained of the king a **promise** *that he would not pardon her.—Burnett.*

I started the **question** *whether duelling was consistent with moral duty.—Boswell.*

I have every **hope** *that the company may accommodate you.—Doyle.*

There is no **doubt** *that breeds may be made as different* as species in many physiological characteristics.
—Huxley.

而して此の如き廣き用法を許す所以は又同時に次の如き用法を生ずる所以である。

(7) 副詞的役目、——§ 41 に說きし Adverbial Objective に匹敵するもので、方向、原因、關係の及ぶ範圍等を表はす(§ 41, 1-2 幷に其の脚註參照)。例へば

Bid her be judge *whether Bassanio*
Had not once a love.—Shakespeare.

卽ち此の場合 be judge を假りに judge (v.) とせば

whether 以下は其目的となる性質を帶びて居る點に於て前項に酷似して居る。然し此原文のまゝならば whether 以下は as to whether……と言ふが如く方向若しくは關係の範圍を指定するもので全く副詞の性質を有する事が分かる。而して此種の副詞的名詞文句は形容詞につゞく場合に殊に多い。例へば

I am *afraid that you will not succeed.*

I am *glad you've come.—Stevenson.*

I am *confident it would have sensibly touched him.*
—Swift.

I was not quite *sure whether they had locked the door.—C. Brontë.*

又動詞にかゝるものとしては

I *rejoice that you are not unjust.*

He *complained that he had been cruelly used.*

He thanked his stars *that he had had the courage to resist.—A. & C. Askew.*

卽ち吾人は此項の結論として名詞文句が如何に副詞文句の方に發展し行くものかと云ふ事(逆に副詞文句が名詞文句相當たる事もある—5參照)を知ると同時に前說(§ 41, 1.2. 及其脚註等)目的なるものが其根柢意義に於て副詞的のものであると云ふ事に對する一段の光明を見る事が出來たのである。

157. 玆に最も注意すべき事は名詞文句中の動詞の**時** (Tense) 及び**法** (Mood) である。前者は普通文法に於て說いてある所であるが、後者は前者程に說明が行屆いて居ないらしいから今玆には特に其法より先に說く。

元來古英語に於ては名詞文句中の動詞は特別なる僅少の場合を除きては**叙想法** (所謂 Subjunctive Mood) を用ひた。例へば

Hīe cwǣdon thæt hē wǣre gōd cyning.

=They said that he *were* a good king.

と云ふ如きであつた。これは何故であるかと云ふと that 以下の名詞文句は、獨立の文 He was a good king と云ふ場合とは根本的に相違があつて其れが嚴密に言語の形式を左右したからである。其根本的の相違とは何であるかと云ふに獨立の文に於て He was a king (古 Hē wæs gōd cyning) と云ふ時は其言者は此事柄を自から確信し事實として述べて居る。然るに They said that he was a good king と云ふ場合に於ては言者に於て事實として陳述する所は "they said" の部分丈けにして that 以下は they なる人の意見にして其意見の當否は己れの與かり知らざる所なるか、若しくは判斷を下すの要なきものである。卽ち獨立の文 He was a king に於ては言者の

事實とする所を述ぶるにより**叙實法** (Fact Mood 通稱 Indicative Mood) was (wæs) を用ひ、一方 They said that he was (古くは were 卽ち wǣre) a king に於ては that 以下が他人の言明せし一箇の思想として述べられ**叙想法** (Thought-Mood 通稱 Subjunctive Mood) were (wǣre) が用ひられたのである。

乍然此等はかくの如き細密なる區別を俟たねばならぬ程のものでもないので、且つ外の原因も加はつて、早くも古英語の時代よりして漸次叙想法の衰微を釀し今日では He said he was a king と言ふ樣になつたのである。乍然古き叙想法の使用は未だ全滅には至らずして或場合には現存して居るし*、又或る場合には假裝して餘喘を保つて居る。吾人は明瞭に此事實を知らねばならぬ。

I. 多く**叙想法**を用ふる場合

(1) **Wish** —— 此語又は同意の語の後には叙想法の用ひらるゝ事が多い。が又**假裝叙想法 may*** の用ひらるゝ場合もある。次の通りである。

(a) 過去を顧みて云ふも返らぬ願を表はすものは叙想法の過去完了を用ふる。例へば

I wish I *had known* something of this before.

—*Goldsmith.*

* 今日一般に叙實法を用ひる場合にも近世初期に於ては次の如き叙想法の用例を見る事がある。

I hope he *be* in love.—*Shakespeare.*

I think he *be* composing as he goes in the street.—*Ben Jonson.*

然しこれは今日尙地方言に殘る古い叙實法の be であるかも知れない。

I wish to the Lord I *had shot* him then, but I spared *him*.—*Doyle*.

(b) 現在の不滿足に對し言ふも及ばぬ願を表はすものは叙想法の過去を用ふる。例へば

I am not mad : I would to heaven I *were !*

—*Shakespeare*.

Poor Miss Taylor! I wish she *were* here again!

—*Jane Austen*.

尤も俗語に於ては此等の場合區別なく叙實法の過去が誤用せられる。例へば

I wish she *was* shot.—*Sterne*.

I wish to the Lord, Mr. Wilson, that I *was* a red-headed man.—*Doyle*.

(c) 未來又は不明の事に關してかくあれかしとの願望を表はす場合、今日の日常語に多いのは普通大抵の文法に說いてある通り、次の如き形式を採る。

I wish you *would* help me.—*Doyle*.

I wish he *would* come at once.—*ibid*.

これは言ふまでもなく will の叙想法過去なのである。この形は極く普通に未來に關する願望に"wish"の後に用ひらるゝがこれが唯一の形式と思つたら大間違である。一體此場合古くは叙想法の現在を用ひたのである

が近代英語に於ては共代用として may を用ふる(§ 68, 1. b 參照)。而して此 may を用ふる方は前の would の文を俗式とせばこれを雅式と言つてもよい。又前者には多少危惧の念を含むに反し、此の方は只管願望の意を表はす心持が强い樣にも思はれるが必しもさうばかりではない。例を擧げると

Bru. I know that we shall have him well to friend.

Cas. I wish we *may*: but yet have I a mind that fears him much.—*Shakespeare*.

Well, I won't intrude upon you, but leave you alone with your letter. I wish it *may* contain something pleasant.—*George Borrow*.

I do most heartily wish that France *may* be animated by a spirit of rational liberty.—*Burke*.

You must have found it very damp and cold. I wish you *may* not catch cold.—*Jane Austen*.

尙序に次の如き例を見ると此の文の may が叙想法現在の代用たる事が分かると同時に祈願文との密接なる關係が更に一層明かになるであらう。

God grant it *be* not upon Tower Hill.—*Kingsley*.

God grant we *may* not hear of shame and sorrow fallen upon an ancient and honourable house of Devon.

—*ibid*.

(2) **豫戒、用意、配慮**を表はす場合も上記の故を以て叙想法現在を用ふる。例へば

See that no man *know* it.—*Matthew*, ix. 30.

Look ye *be* true.—*Shakespeare.*

The State must look their proceedings *be* just: the Church must look their devotions and actions *be* pious.—*Archbishop Laud.*

Moreover, at a proper season, the tithing men must take heed that she *go* both to school and to meeting.
—*Hawthorne.*

但し此場合に於ては屢々假裝叙想法 should が用ひられる。例へば

In our nature, however, there is a provision, alike marvellous and merciful, that the sufferer *should* never know the intensity of what he endures by its present torture, but chiefly by the pang that rankles after it.
—*Hawthorne.*

更に近代に及んでは屢々叙實法現在を用ふるまでに變遷し來つた。例へば

Take him away now, then, you gaping idiot, and see that he *does* not bite you.—*Scott.*

Satisfy yourselves there *is* no trickery.—*H. G. Wells.*

又時には shall, should を用ふる場合もある。此場合の助動詞は § 159, II に依りて左右せられるものである。例へば

Scott is (was) very careful that nothing shall (should) interfere with his plans.

(3) **要求**せられ又は**命令**せらるゝ事柄を表はすものも上記の故を以て叙想法現在が用ひられる。例へば

We enjoin thee that thou *carry.*—*Shakespeare.*

Therefore bid thy scribes that it *be* written down.
—*H R. Haggard.*

而して此法は壯重を要する文語としては常に用ひられる。例へば

The sentence is that the prisoner *be* hanged.

The regulation is that no candidate *take* a book into the examination room.

但し普通の場合に於ては shall* を其代用とし § 159, II の規定によりて又 should たらしめる。例へば

It is proposed that Parliament *shall* allow a company to be formed.

The laws of God decree that man *shall* purchase

* 叙想法代用としての shall 及 should の關係は § 172 に更ためて說く。

women, that woman *shall* give herself to man, for other coin than that of good sense.—*J. K. Jerome.*

又時には假裝叙想法 should が用ひられる。例へば

I will that he *should* become my husband.

—*H. R. Haggard.*

且 I command that you *should* act justly の如きは日常普通であり、又俗語にては屢々叙實法が用ひらるゝは周知の事と信ずる。

(4) 疑問の意を含むもの、所謂 Dependent Questionに於て、殊に if, whether の後に於ては今尚叙想法の現在及び過去が普通である。例へば

I care not who *know* it.—*Shakespeare.*

I wonder if Titania *be* awaked.—*ibid.*

All men mused in their hearts of John, whether he *were* the Christ, or not.—*Luke*, iii. 15.

I ask her if she *love* me.—*Tennyson.*

Let me out, lads, and I soon show him whether I *be* a coward.—*Kingsley.*

I wanted just to see if it *were* possible.—*Miss Mulock.*

Even those who had often seen him were at first in doubt whether he *were* truly the brilliant and graceful Monmouth.—*Macaulay.*

Duke of Monmouth (1649–1685) 英王チャールズ二世の庶子 王位を要求し、チェームズ二世に反抗 失敗 捕へられて 斬首サレ

Whether this *were* a vision, or what, he could not say.—*H. R. Haggard.*

少し例が多過ぎると思つたけれ共、此事は兎角忘れられ勝の事と信じて敢て列擧した。無論かゝる場合に叙實法を用ふるは日常普通の事で又さして新らしき用法でもなく書物にも常に見る所である。例へば

I care not who *knows* so much.—*Shakespeare.*

I asked him whether it *was* difficult to learn.

—*Captain Marryat.*

然し乍ら叙想法を用ふる事は今日尚存在の法である事を忘れてはならぬ。例へば

a couple of days = 日

Kapl

二時間

After a journey of a couple of hours, he arrived at the nearest railway-station thereto, namely, Wellington College, and was met by a liveried servant, who asked if he *were* Dr. Murray.—*Hayden Church* (*in the Strand Magazine*, Sept. 1915.)

II. 假裝叙想法 should* を多く用ふる場合。此の場合の should は吾人が臨時に假裝叙想法と名付けた通り、其の趣旨が古英語の叙想法の心持を should に移したものである(此節初め pp. 224–5 參照)。故に此 should の

* § 172 參照。此 should は邦語の「何々せんは難く何々せんは易し」等の「せん」の内に含まれて居る叙想的意義を有するものである。されば此を「意外と云ふ意味の should」「正當を意味する should」など云ふが如きは全く言語道斷である。聖書 *Lamentations*, iii. 26–27 比較參照。

意義は或事を吾人の判斷に訴ふる思考上の問題とするにあるので、決して他の意はない。而して此れは It を主語とする所謂無人稱の構文 (Impersonal Construction) に於て最も多いから、先づ其の場合から說く事とする。其用ひらるゝのは次の樣な多くの場合である。

It is strange, singular, extraordinary, wonderful, etc.

It is natural, no wonder, etc.

It is good, proper, right, well, etc.

It is not good, wrong, fortunate, etc.

It is regrettable, unfortunate, a pity, etc.

It is important, necessary, etc.

It is useless, unimportant, unnecessary, etc.

It is likely, probable, etc.

It is impossible.

It is not impossible.

Is it possible?

(a) 卽ち此等の多くの場合に伴ふ should は或事を事實として見るにあらず一箇の思考上の問題として提出する力を有するものにして、It is……はそれに對する判斷、批評等を表はすものである。而して其提出せらるゝ問題が只の問題であるならば should には直ぐ不定法 (to なき) が付き、其問

欠

欠

158. 前節說く所の用法とその意義とが分かれば次の如きは自から明瞭である。

(1) **Fear** には二ッの場合がある。

(a) 未來（過去を基點とする未來をも含む）に關する懸念、危惧を表はす時は次の如き形式を採る。

I {fear / feared} that 又は lest he {叙想法 / may / might} 又は should.....

例へば

I *fear lest* that Black Douglas *play* us some trick.
—*Scott.*

I do *fear lest* your condescension *should* make him forget that he is only a poor squire's orphan.—*Kingsley.*

I *feared lest* there *might* be a scandal in the church.
—*Doyle.*

'Tis a just *fear*, lest you *should* prove false.—*Butler.*

(b) 未來に關せざる時は叙實法を用ふる。例へば

I fear that I *have brought* some traces of the storm and the rain into your snug chamber.—*Doyle.*

(2) **Expect** にも次の二場合あるは自から明白であらう。即ち

(a) 未來（過去を基點とする未來をも含む）に關する豫期を表はす時は多く should を用ふる。例へば

Providence furnishes materials, but *expects* that we *should* work them up ourselves.

(b) "suppose" を意味する時は叙實法を用ふる。

例へば

I *expect* that he *is* (*was, will be*) away.

此節を斷片として見ると一向要領を得ない文字であらうが、前節を充分了解せば明白なるものがあるであらう。

尙上記の諸場合の外は叙實法を用ふるのである。

159. 時の一致 (Concord of Tenses). 又一に時の連關 (Sequence of Tenses) ともいふ。凡そ重複文に於ては主文と從文との間に動詞の時の合理的關係がなければならぬ。しかし所謂時の一致として特別の注意を要する主なるものは第一には名詞文句に於て其動詞が叙實法たる時で第二には副詞文句の內目的を表はすものに於て may の助動詞を用ふる場合である。其他の場合は他に更らに重大なる注意點を有するか若しくは全く獨立文としての場合と同樣、其場合の意味よりして直ちに其用ふべき時(tense) の判定が出來るものである。故に本書に於ては先づ名詞文句にして其動詞が叙實法たる場合に就きてのみ其の法則を說く。而して其法則と云ふべきは極めて簡單に一則を有するのみであるがこゝには對照の便利のため特に二則制による。

I. 主文の述語が現在又は未來の部類に屬するものなる時は從文の述語は其場合の意味に應じ如何なる時を採つてもよろしい。例へば

I know, shall know, etc.
- that he writes a letter. .....(1)
- that he is writing a letter. .....(2)
- that he has written a letter. .....(3)
- that he has been writing a letter. .....(4)
- that he wrote a letter. .....(5)
- that he was writing a letter. .....(6)
- that he had written a letter. .....(7)
- that he had been writing a letter. .....(8)
- that he will write a letter. .....(9)
- that he will be writing a letter. .....(10)
- that he will have written a letter. .....(11)
- that he will have been writing a letter.(12)

II. 主文の述語が過去の部類に屬するものなる時は從文の述語も過去でなくてはならぬ。

今前項の諸例につき主文を I knew に變じて其從文が如何に過去に移るかを示す。

- that he wrote a letter. .....(1)
- that he was writing a letter. .....(2)
- that he had written a letter. .....(3)

I knew
- that he had been writing a letter. .....(4)
- that he had written a letter. .....(5)
- that he had been writing a letter. .....(6)
- that he had written a letter. .....(7)
- that he had been writing a letter. .....(8)
- that he would write a letter. .....(9)
- that he would be writing a letter. .....(10)
- that he would have written a letter....(11)
- that he would have been writing a letter. (12)

是故に或時に於て I know that he writes a letter, etc. と言ひ得る事は、其時より若干時の經過したる後に於ては I knew that he wrote a letter, etc. と言ふべきものである。更らに其變化の要點を指摘すれば次の通りである。

主文現在又は未來の時	主文過去の時
不定現在 (Pres. Indefinite)*	不定過去 (Preterite Ind.)
定現在 (Pres. Definite)	定過去 (Preterite Def.)
不定現在完了 (Perfect Indef.)	不定過去完了 (Pluperfect Ind.)
定現在完了 (Perfect Def.)	定過去完了 (Pluperfect Def.)
不定過去 (Preterite Ind.)	不定過去完了 (Pluperf. Ind.)
定過去 (Preterite Def.)	定過去完了 (Pluperf. Def.)

* Indefinite は普通形、Definite は進行形、Perfect = Present Perfect; Preterite = Past; Pluperfect = Past Perfect; Preterite Future は過去より見たる未來卽ち should, would の形。

不定過去完了	(Pluperfect Ind.)	變化なし
定過去完了	(Pluperfect Def.)	變化なし
不定未來	(Future Ind.)	不定過去未來 (Preterite Fut. Ind.)
定未來	(Future Def.)	定過去未來 (Preterite Fut. Def.)
不定未來完了	(Future Perfect Ind.)	不定過去未來完了 (Preterite Fut. Perfect Ind.)
定未來完了	(Fut. Perf. Def.)	定過去未來完了 (Preterite Fut. Perf. Def.)

卽ち主文の述語が現在若しくは未來なる時は從文に十二種の時を許すのが、主文の述語が過去となれば從文に許さるゝ時は八種に歸するのである。

法則は上記の通りであるが玆に吾人は此法則外に立つ特殊の場合ある事を知らねばならぬ。その特殊の場合とは

(1) 若し從文中に言表はす事が不易の眞理なる時は、主文の述語過去なりとも從文はそれに動かさるゝ事なく述語は現在である。例へば

He *taught* the boys that honesty *is* the best policy.

He *did* not know that the earth *goes* round the sun.

(2) 若し從文中に言表はす事が常習的の事にして今尙眞なる時は、主文の述語過去なりとも從文はそれに動かさるゝ事なく述語は現在であり得る。例へば

I *told* him that I *take* a walk every morning.

He *was* glad to hear that his brother *is* industrious.

此場合、現在を念頭に置かざる時は法則に從ひて從文に時の變化を生ずる。例へば

I *knew* that my assistant *was* a good man.—*Doyle.*

(3) 若し從文中に言表はす事が單一なる歴史的事實なる時は、主文の述語過去なりとも、それが現在又は未來なる時と同樣、從文の述語は過去である。例へば

I *know*
I *will tell* you } how Columbus *discovered* America.
I *learned*

160. 代用と短縮 名詞文句の代用たるものに目的格＋Dative Infinitive 及び for＋目的格＋Dative Infinitive なる形がある。例へば

They forbade *it to be slain* (=that it should be slain).—*Bulfinch.*

I should like *for my brother to sit too* (=that my brother should sit too).—*Watts-Dunton.*

For you to know could not have helped us, and might possibly have led to my discovery.—*Doyle.*

最後の例に於ける to my discovery は to my being discovered である事を言添へて置く。尙所在は The Hound

of the Baskervilles, xii. であるが兎に角 "For you to know" は "That you should know (that I was hiding in this place" 此事は前からのつゞき上不必要で略してある) の代用である。此用法は從來何れかと云へば充分の注意を與へられなかつたもので、然も文法上は餘程注目に値するものであるから後章（第二十二章 §§ 240–5）更ためて詳說する。

それから疑問詞を以て連結せらるゝもので、其主語が主文によりて明で、其意が「何々スベキモノカ」と云ふ樣なる時は次の如き代用句によりて文の短縮が行はれる。

Tell me *what to do* (=what I am to do).

I do not know *where to go* (=where I am to go).

How to begin was more than she knew.—*Kingsley.*

I see you know *how to make a shift.*

—*George Borrow.*

Fanny, in dismay at such an unprecedented question, did not know *which way to look*, or *how to be prepared* for an answer.—*Jane Austen.*

The trustees are at their wits' end *what to do* with the money.—*Doyle.*

又此と同樣の句は主語たるものが不定にして一般的なる時にも用ひられる。例へば

Grammar teaches not only *how to write correctly*, but also *how to read rightly*.

For twenty years we were teaching Europe *how to fight*.--*Doyle*.

第拾六章 直接叙法及び間接叙法

161. 他人の言を傳ふるに二つの法がある。即ち

(1) 其原語の儘傳ふる法、例へば

He says, "I will go."

(2) 其原意のみを採り、己れの言葉に直して傳ふる法、例へば

He says that he will go.

前者を直接叙法 (Direct Narration, D. Discourse, D. Speech 又は Oratio Recta) と稱し、後者を間接叙法 (Indirect Narration, Ind. Discourse, Ind. Speech 又は Oratio Obliqua) と云ふ。

直接叙法に於ては原語を其儘 " " の中に入れて一種の名詞文句とするのであるが " " は一箇獨立の文であつて從屬文句ではないから極めて簡單である。然るに間接叙法に於ては言葉を傳達者の立場より見たるものに直し、文法より云ふと純然たる從屬文句とするのであるから餘程注意しないと誤傳の虞がある。凡そ原語を傳達の言葉に直すには、凡次の四ッの事柄を考

量して其場合に適應する樣に直さねばならぬ。

(1) 傳達せらるべき原文の種類如何

(2) 原文の發言者、その聽者、傳達者及び被傳達者との關係如何

(3) 原文の言はれたる時と、之れを傳達する時との時の關係如何

(4) 原文の言はれたる場所と、之れを傳達する場所との位置の關係如何

而して此間接叙法は、事實上極めて技巧的のもので自然的のものではないが、現代の英語に於ては非常に廣く用ひられ、殊に會話に於ては殆んど之のみと言つても過言でない。故に此方法に精通する事は英語を正しく用ふる上にも、又英語を正しく解する上にも極めて重要なる事である。然るに普通の文法書に於ては此法を說く事比較的不精密である。英語國民に取りては這般の事は幼少より慣習上自然に習得するものであるから別段くどくどしく說く必要はないが吾人日本の英語學習者に於ては全く事情を異にする故、本書に於ては甚だ繁雜であるが、忍びて詳說する事としたい。先づ傳達すべき原文の種類に依り次の八大項目に分ちて順次說く事とする。

I. 傳達せらるべき文が叙述文なる場合

II. 傳達せらるべき文が**疑問文**なる場合
III. 傳達せらるべき文が**命令文**なる場合
IV. 傳達せらるべき文が**感動文**なる場合
V. 傳達せらるべき文が**祈願文**なる場合
VI. 傳達せらるべき文が**合成文**なる場合
VII. 傳達せらるべき文が**重複文**なる場合
VIII. 傳達せらるべき文が**混成文**なる場合

而して本章に用ふる術語を次の如く約束して置く。

(1) **傳達文句** (Reporting Clause)—例へば He says, "I am happy." に於ける He says.

(2) **傳達動詞** (Reporting Verb)—上例 says.

(3) **被傳達文** (Reported Speech)—上例 I am happy.

(4) **元發言者** (First Speaker)—" " 內の事を言ひし人、卽ち上例 He says の "He" なる人

(5) **元聽者** (First Hearer)—元發言者の直話を受けし人、卽ち He said to her, "You are happy." ならば此 "her" なる人

(6) **傳達者** (Reporter)—元發言者の言葉を他に傳達する人、卽ち He says, "I am happy." の全體を言ふ人

(7) **被傳達者** (Reported Party)—傳達者より傳達を受くる人

I. 被傳達文が叙述文なる場合

162. 此場合には直叙* の " " を去り連結として that を入れる（尤もこれは略せらるゝ事もある）。例へば

He says, "I am happy."
He says (that) he is happy.

而して " " の中の文を **that-文句**† に更むるには場合によりて其被傳達文中に色々の變化を要する。今より A, B, C, D, E, F の六項目に分ちて其受くべき變化の模樣を說く。

(A) 被傳達文中なる人稱代名詞の受くる變化

163. (1) 傳達文句の主語が一人稱なる場合、卽ち元發言者と傳達者とが同一人なる場合には人稱に變化が起らない。例へば

I say, "*I* am happy."
I say that *I* am happy.

I say, "*You* are happy."
I say that *you* are happy.

*直叙——直接叙法の略。間叙——間接叙法の略。
†that-文句＝thatを連結とする文句。同樣に if-文句（本項には關係なけれど）など云ふ。

I say, "*He* is happy."
I say that *he* is happy.

(2) 傳達文句の主語が二人稱なる場合、即ち元發言者と被傳達者とが同一人なる場合には、其時に應じて次の如き變化を來す。

	直叙	間叙
(a)	I.....	thou 又は you
(b)	We.....	we 又は you
(c)	Thou.....	I 又は he, she, it の內
(d)	You.....	I 又は he, she, it, they の內
(e)	He, she, it...	I 又は he, she, it の內
(f)	They.....	We 又は they.

上表は例を示せば次の如くなる。

(a) Thou sayest, "*I* am happy."
Thou sayest that *thou* art happy.

You say, "*I* am happy."
You say that *you* are happy.

(b) Thou sayest, "*We* are going."
Thou sayest that *we* are going.
(原文 we が傳達者を含む時)
Thou sayest that *you* are going.
(原文 we が傳達者を含まざる時)

You say, "*We* are going."
You say that *we* are going.
You say that *you* are going.

(c) Thou sayest, "*Thou* art just."
Thou sayest that *I* am just.
(元聽者と傳達者とが同一人なる時)
Thou sayest that *he* is just.
(元聽者が傳達者以外の男なる時)
Thou sayest that *she* is just.
(元聽者が傳達者以外の女なる時)
Thou sayest that *it* is just.
(元聽者が傳達者以外のものにして中性を以て表はさるべきものなる時)

You say, "*Thou* art just."
You say that *I* am just.
You say that *he* is just.
You say that *she* is just.
You say that *it* is just.

(d) Thou sayest, "*You* must rest."
Thou sayest that *I* must rest.
(元聽者が傳達者と同一人なる時)
Thou sayest that *we* must rest.

（元聽者が傳達者を含む二人以上なる時）
Thou sayest that *he* must rest.

（元聽者が傳達者以外の男一人なる時）
Thou sayest that *she* must rest.

（元聽者が傳達者以外の女一人なる時）
Thou sayest that *it* must rest.

（元聽者が傳達者以外のものにして中性を以て表はさるべきものなる時）
Thou sayest that *they* must rest.

（元聽者が傳達者以外のものにして二人以上なる時）

You say, " *You* must rest."
You say that *I* must rest.
You say that *we* must rest.
You say that *he* must rest.
You say that *she* must rest.
You say that *it* must rest.
You say that *they* must rest.

(e)
Thou sayest, " *He* (*She*, *It*) may live."
Thou sayest that *I* may live.

（原文 He, She, It が傳達者となる時）
Thou sayest that *he* (*she*, *it*) may live.

（原文 He, She, It が傳達者以外のものなる時）

You say, " *He* (*She*, *It*) may live."
You say that *I* may live.
You say that *he* (*she*, *it*) may live.

(f)
Thou sayest, " *They* write letters."
Thou sayest that *we* write letters.

（原文 they が傳達者を含める時）
Thou sayest that *they* write letters.

（原文 they が傳達者を含まざる時）

You say, " *They* write letters."
You say that *we* write letters.
You say that *they* write letters.

(3) 傳達文句の主語が三人稱なる場合には其時に應じて次の如き變化をなす。

(a) *He* says,
" I " .....he.
" We " .....we, you 又は they.
" Thou ".....I, thou, you, he (N),* she, 又は it.
" You " .....I, we, thou, you, he (N),* she, it 又は they.
" He ".....I, thou, you 又は he (N).*

*(N) は名を添へると云ふ事。説明は p. 257.

"She".....I, thou, you 又は she.
"It".....I, thou, you 又は it.
"They".....we, you 又は they.

(b) *She* says,
- "I".....she.
- "We".....(a) 表と同じ
- "Thou"....I, thou, you, he, she (N) 又は it.
- "You".....I, we, thou, you, he, she (N), it 又は they.
- "He".....I, thou, you 又は he.
- "She".....I, thou, you 又は she (N).
- "It"..... / "They".....(a) 表と同じ

(c) *It* says,
- "I".....it.
- "We".....(a) 表と同じ
- "Thou"....I, thou, you, he, she 又は it (N)
- "You".....I, we, thou, you, he, she, it (N) 又は they.
- "He".....I, thou, you 又は he.
- "She".....(a) 表と同じ
- "It".....I, thou, you 又は it (N).
- "They"....(a) 表と同じ

(d) *They* say,
- "We".....(a) 表と同じ
- "Thou"....I, thou, you, he, she 又は it.
- "You".....I, we, thou, you, he, she, it 又は they (N).
- "He".....I, thou, you 又は he.
- "She"..... / "It".....(a) 表と同じ
- "They".....we, you 又は they (N).

上表を例示せば次の通りである。

(a) He says, "....." の場合

(i) He says, "*I* am glad."
He says that *he* is glad.

(ii) He says, "*We* are glad."
He says that *we* are glad.
(原文 we が傳達者を含む時)
He says that *you* are glad.
(原文 we が傳達者を含まず被傳達者を含む時)
He says that *they* are glad.
(原文 we が傳達者をも被傳達者をも含まざる時)

(iii) He says, "*Thou* seest a man."

He says that *I* see a man.

（元聽者が傳達者となる時）

He says that *thou* seest a man.

He says that *you* see a man.

（此二ッは何れも元聽者と被傳達者と同一人なる時）

*He says that *he* (*name*) sees a man.

（元聽者が傳達者被傳達者以外の男たる時）

He says that *she* sees a man.

（仝上女なる時）

He says that *it* sees a man.

（同上中性にて表はさるべきものなる時）

(iv) He says, " *You* should stop."

He says that *I* should stop.

（元聽者が傳達者となる時）

He says that *we* should stop.

（元聽者が傳達者を含み二人以上なる時）

He says that *thou* shouldst stop.

（元聽者が被傳達者と同一人なる時）

He says that *you* should stop.

（元聽者と被傳達者と同一人なるか、又は元聽者が被傳達者を含みたる二人以上なる時）

* 說明は p. 257.

*He says that *he* (*name*) should stop.

（元聽者が傳達者被傳達者以外の男なる時）

He says that *she* should stop.

（同上女なる時）

He says that *it* should stop.

（同上中性を以て表はさるべきものなる時）

He says that *they* should stop.

（元聽者が傳達者被傳達者を含まず二人以上なる時）

(v) He says, "*He* is honest."

He says that *I* am honest.

（噂をせられたる人が傳達する時）

He says that *thou* art honest.

He says that *you* are honest.

（此二ッは何れも噂をせられたる人に傳達する時）

*He says that *he* (*name*) is honest.

（原文 he が傳達者被傳達者以外のものなる時）

(vi) He says, " *She* reads well."

He says that *I* read well.

（噂をせられたる女が傳達する時）

He says that *thou* readst well.

* 說明は p. 257.

He says that *you* read well.

（此二ツは何れも噂をせられたる女に傳達する時）

He says that *she* reads well.

（原文 she が傳達者被傳達者以外の女なる時）

(vii) He says, "*It* is good."

He says that *I* am good.

（原文 it と言はれしものが傳達者となる時）

He says that *thou* art good.

He says that *you* are good.

（此二ツは何れも原文にて it と云はれしものに傳達する時）

He says that *it* is good.

(viii) He says, "*They* can run."

He says that *we* can run.

（原文 they が傳達者を含む時）

He says that *you* can run.

（原文 they が傳達者を含まず被傳達者を含む時）

He says that *they* can run.

（原文 they が傳達者をも被傳達者をも含まざる時）

*上例 (iii) (iv) (v) の中此の印を付けたるものは特に注意を要する。即ち若し (iii) の場合に於て

He says, "Thou seest a man."

を單に He says that he sees a man.

とするとせば (i) の場合の I が he となりし場合と區別が無くなりて多くの不都合を生ずる源となる。故に (iii) の場合に於ては直叙の thou を其人の名に更むるか he として其次に（ ）内に其人の名を入れて置くのである。即ち原文 thou なる人の名を John とせば

He says, "Thou seest a man." は

He says that *John* sees a man. とするか、又は

He says that *he* (*John*) sees a man. とするのである。

同様 (iv) に於て原文 you なる人の名を James とせば間叙の文は

He says that *James* should stop. 又は

He says that *he* (*James*) should stop. となり、

(v) に於ても原文 he なる人の名を Henry とせば間叙の文は

He says that *Henry* is honest. 又は

He says that *he* (*Henry*) is honest. である。*

又同様に

James says to Henry, "*I* am wrong."

* Cf. And the host of the Fonda.....explained to Concepçion Vara that the English Excellency had selected him at his—*the host's*—assurance that Algeciras contained no other so honest.—*H. S. Merriman.*

James says to Henry, "*You* are wrong."

James says to Henry, "*He* is wrong."

の三ッは何れも

James says to Henry that *he* is wrong.

となり得るも、それでは區別なく要領を失ふから上の三文は順次に

James says to Henry that *he* (*James*) is wrong.

James says to Henry that *he* (*Henry*) is wrong.

James says to Henry that {*John* / *he* (*John*)} is wrong.

の如くにして其間の別を明瞭にする。

此上澤山の例を擧げる事は煩はしいから只一箇の例を加ふるに止めて置く。

The abbot of that day told him that it was against *our* law to admit a woman under *our* roof, to which he answered that if *we* did not, *we* should have no roof left, for *he* would burn the place and kill every one of *us* with the sword.—*H. R. Haggard.*

之れを直叙に直せば

The abbot of that day told him, "It is against *our* law to admit a woman under *our* roof." Thereupon he answered, "If *you* do not, *you* shall have no roof left,

for *I* will burn the place and kill every one of *you* with the sword."

これは某ラマ僧院長と Alexander the Great との問答を十九世紀の一ラマ僧が或英人に話して居る所である。然るに此ラマ僧は其昔前生に於て（丁度 Alexander の亞細亞征服の當時）前記僧院長の下に修業中のものであつたので、二千年もの後英人に向つて其當時の事を傳達するに、僧院長が our と云ひしを其儘 our にて傳達し Alexander が僧院長に向つて you と云ひしものが we となつて居るのである（尙上例は "Ayesha" の二章にある）。

此で He says, "……" の場合は說盡した。以下 She says, It says の如き場合を一々かくの如く說く事は今や不必要であるから省き、只注意すべき場合丈けを說く。

(b) She says, "……" の場合

Flora says to Mary, "I am beautiful."

Flora says to Mary, "You are beautiful."

Flora says to Mary (of Lily), "She is beautiful."

は順々に次の如くする。

Flora says to Mary that she (Flora) is beautiful.

Flora says to Mary that she (Mary) is beautiful.

Flora says to Mary that {Lily / she (Lily)} is beautiful.

(c) It says, " ..... " の場合

A child says to another child, " I can walk."

A child says to another child, " You can walk."

A child says to another child (of still another child), " It can walk."

は順々に次の如くする。

A child says to another child that it (A) can walk.

A child says to another child that it (B) can walk.

A child says to another child that {C / it (C)} can walk.

(d) They say, " ..... " の場合

(1) They say, " *We* are to go on an excursion."

They say that *we* are to go on an excursion.

(或團體の一部の人が全團體につきて言ひし事を團體中他の部の人が傳達する樣の時)

They say that *you* are to go on an excursion.

(或團體中の一部の人が全團體につきて言ひし事を同團體外の人が同團體中の他の部の人に傳達する時)

They say that *they* are to go on an excursion.

(傳達者被傳達者共に團體外の人なる時)

(2) The Russians say to the French, "We are brave."

The Russians say to the French, " You are brave."

The Russians say to the French (of the Germans), " They are brave."

は順々に次の如くなる。

The Russians say to the French that they (the R.) are brave.

The Russians say to the French that they (the F.) are brave.

The Russians say to the French that {the G. / they (the G.)} are brave.

(B) 被傳達文中なる指示語の受くる變化

164. (1) 被傳達文に於て指示せられたるものと傳達者との位置の關係が、元發言者とそのものとの位置の關係に等しき時は、指示語に何の變化もない。例へば

{He says, " I like *this* book."
{He says that he likes *this* book.

(元發言者の眼前なる本が、等しく傳達者の眼前にある時)

{He says, " I don't like *that* book."
{He says that he does not like *that* book.

(元發言者より距れたる本が、等しく傳達者よりも距れたる時)

(2) 前記の位置關係が異なる時は其場合の事情如何によりて次の如き交互の變換を見る。

this ⇄ that　　these ⇄ those

例へば

He says, "*This* dog is mine."
He says that *that* dog is his.

(元發言者の近くに居る犬が、傳達者よりは遠き時)

He says, "*That* dog is mine."
He says that *this* dog is his.

(元發言者より距れたる犬が、傳達者には近き時)

(C) 被傳達文中なる場所、方法、模樣等を指示する副詞の受くる變化

165. (1) 元發言者が發言の當時に居る場所と、傳達者が傳達の當時に居る場所とが同一なる時、場所の副詞に變化はない。例へば

He says, "I will go *there*."
He says that he will go *there*.

He says, "My brother is coming *here*."
He says that his brother is coming *here*.

(2) 前記の場所が異なる時は、其場合に應じて次の如き交互の變換を見る。

here ⇄ there
hither ⇄ thither
hence ⇄ thence

又此場合それに伴ひて come ⇄ go の如き變換がある。例へば

He says, "I will *go there*."
He says that he will *come here*.

(例へば A 地に在る人が B 地に行かんとの意味を以て "go there" と云ひしを、或人が B 地に行きて他人に傳達する樣なる場合)

He says, "My brother will soon *come here*."
He says that his brother will soon *go there*.

(前記の反對の場合)

(3) 方法、模樣等を表はす指示的副詞も、傳達者より見たる關係が、元發言者より見たる關係と異なる場合に於ては其時に應じて次の如き交互の變換を見る。

thus ⇄ so
hereby ⇄ thereby
herein ⇄ therein
etc.　　etc.

例へば

He says, "This may be explained *thus*."
He says that this may be explained *so*.

{He says, "This may be explained *so*."
{He says that this may be explained *thus*.

(D) 被傳達文中なる動詞が受くる時 (Tense) の變化

166. 元來間叙の全文は重複文にして其 that-文句は傳達文句に對し純然たる從屬の地位にある名詞文句である。故に傳達文句と that-文句との間には前章 § 159 に説明せる通りの動詞の時の一致がなければならぬ。於是傳達者が傳達する時が元發言者が發言せし時より後にて、傳達文句に過去の動詞を用ふべき場合には被傳達文句の動詞の時 (Tense) は § 159, II に示した通りの變化を受ける。例へば

{He said, "I *wait* for you."
{He said that he *waited* for me.

{He said, "I *am waiting* for you."
{He said that he *was waiting* for me.

{He said, "I *have waited* for you."
{He said that he *had waited* for me.

{He said, "I *have been waiting* for you."
{He said that he *had been waiting* for me.

{He said, "I *waited* for you."
{He said that he *had waited* for me.

{He said, "I *was waiting* for you."
{He said that he *had been waiting* for me.

{He said, "I *had waited* for you."
{He said that he *had waited* for me.

{He said, "I *had been waiting* for you."
{He said that he *had been waiting* for me.

{He said, "I *shall wait* for you."
{He said that he *should wait* for me.

{He said, "I *shall be waiting* for you."
{He said that he *should be waiting* for me.

{He said, "I *shall have waited* for you."
{He said that he *should have waited* for me.

{He said, "I *shall have been waiting* for you."
{He said that he *should have been waiting* for me.

尙委しくは § 159 參照。

但し次の場合は此規則の適用外なる事 § 159 特殊の場合と同樣である。

(1) 被傳達文が絕對不變の眞理を言表はす場合には不變現在の動詞が用ひられる。例へば

He said to me, "Honesty is the best policy."

He told me that honesty *is* the best policy.

(2) 被傳達文に言ふ所が常習的の事なるか、傳達の當時に於ても眞なる時は不變現在の動詞を用ふる事が出來る。例へば

I *forgot* to tell you that Silver *is* a man of substance.

—*Stevenson.*

"Never mind, I'll hand it to you in Paris."

"But I am not going to Paris."

"How is—what did I understand you to say?"

"I *said* that I *am* not going to Paris."

—*Mark Twain.*

但し此場合、元發言者の言ひし當時の事のみにつきて考ふる時は動詞の時を變化さする事、§159 特の但書の通りである。

(3) 被傳達文が歴史上の單一なる事實を言表はすものなる時、その動詞は不變過去の時を採る。例へば

The teacher said, "America *was discovered* by Columbus."

The teacher said that America *was discovered* by Columbus.

(E) 被傳達文中なる時の副詞が受くる變化

167. 前節說く如く被傳達文の動詞の時が變化する場合、時を示す副詞が之れに伴ひて變化するは固より當然である。而して其變化の模樣は其の指定せらるゝ動作の起る時と元發言者發言の時との關係と該指定時と傳達

者傳達の時との關係の等差如何によりて種々に變すべき性質のもので一二則を以て律せられるものではない。要は傳達者が傳達の當時より、其指定されたる時を指呼するに最も便宜なる副詞又は副詞句（場合に依りては文句たる事も出來る）を用ふるのであるから、先づ千差萬別と云つても宜しい位である。又場合によりて變ぜざる事あるも固より當然である。今僅少の例を擧げる。

He said, "I am seven years old *now*."
He said that he was seven years old *then*.

He said, "I was a happy child *then*."
He said that he had been a happy child *then*.

He said, "I shall have to wait until *then*."
He said that he should have to wait until *then*.
He said that he should have to wait until *now*.

（傳達の當時が丁度元發言者の意味せし時なる場合）

He said, "It rains here *to-day*."
He said that it rained there *yesterday*.

（翌日傳達する場合）

He said that it rained there *the day before yesterday*.

（翌々日傳達する場合）

He said that it rained there *on that day*.

（後日に至り傳達する場合）

He said, "It rained here *yesterday*."
He said that it had rained *yesterday*.
He said that it had rained *the day before*.

其他 to-morrow が the next day, the day following 等に、last night が the night before, the previous night 等に、to-night が that night 等に、ago（今ヨリ……前）が before（其時ヨリ…… 前）に變る等は極めて普通の事である。但し何れの場合と雖も傳達の當時より一番便宜なる言方を用ふるのであるから某々の語が某々に變ずる等の定規は指定する事は出來ぬと言つた方が眞であると云ふ事を忘れてはならぬ。故に又傳達者の立場より見たる時の關係が元發言者の立場より見たる時の關係と等しき時は變化がないのも固より當然である。例へば

He said he knew they had tried to lay a cable ten years *ago*, but it had been in his mind, somehow, that they hadn't succeeded.—*Mark Twain.*

(F) 被傳達文中の shall, will の事

168. 或直叙の文を間叙に更むれば代名詞の人稱の變ずる事多きは前說の通りである。故に代名詞が被傳達文中主語の地位にある時それに對する述語たる動詞の人稱(場合によりては數も)の變化するは言ふまでもない。然らば shall, will は如何、此問題に對する答は極めて

簡單である。曰く

(1) 獨立文に於ける shall, will 使用上の規定は間叙の從屬文句に適用せず。

(2) 間叙の文に於ては直叙の文中にある shall, will を其儘（tense 丈けは變化する）繼承す。

(3) 但しかくの如き繼承法に依り、間叙の文に I (we) will (would) が純未來を表はす樣ならば、其時に限り原文の will (would) を廢し、shall (should) を用ふる。

されば此項に關して特に注意すべきは僅かに (3) に該當する場合ばかりである。今例を以て示せば

John says to Charles, "If you fall overboard, you *will* drown.*

の場合、Charles が傳達するとせば

John tells me that, if I fall overboard, I *shall* drown.

となるの類である。例へば

You think now *I shall* get into a scrape at home.
—*G. Eliot.*

今日吾人の依るべき所は上記で盡して居る。乍然元來 shall, will の用法それ自身が極々近代まで一定しなかつたのであるから（此事は他日詳說するつもり）間叙の場合に於ては尙の事反例を見る事が多い。此事は承知して置かなくてはならぬ。

* 此 drown の用法につきては § 144 注意 3 參照。

II. 被傳達文が疑問文なる場合

169. 此場合と雖も代名詞、動詞、形容詞、副詞等に關する注意事項は前記叙述文の場合と同一なるは論を俟たない。故に此場合特に注意すべき事は次の數項に過ぎない。

(1) 直叙の傳達動詞が to say, to remark 等であるならばそれを to ask, to inquire 等に更むべく、元聽者の言表はさるべき時は之れを與格又は of の目的として此等の動詞の次に置く。

(2) 被傳達文が疑問詞を有するものなる時はそれを問叙の連結とし、疑問詞を有せざる時は if 又は whether を入れて連結とする。

(3) 被傳達文は其構造を更めて叙述文の時の如く主語を先にし述語を後にする（此點に關しては下の例後の但書參照）。而して "?" は之れを廢棄する。例へば

He said to me, "What makes you laugh so?"
He asked me what made me laugh so.

He said to me, "Who and what are you?"
He asked me who and what I was.

He said to me, "Are these apples ripe?"
He asked me if those apples were ripe.

I asked him *if* he could tell me *what* had become of the Red Headed League. He said that he had never heard of any such body. Then I asked him *who* Mr. Duncan Ross was.—*Doyle.*

但し、述語が to be にして疑問代名詞が補語たる場合（殊に主語に修飾句の附屬する時）には屢々述語が主語より先に立つ。例へば

He asked me, "What are the books you want?"
He asked me what were the books I wanted.

She asked me, "Which is the shortest cut across the field?"
She asked of me which was the shortest cut across the field.

Ask of the great sun *what is light,*
Ask *what is darkness* *of the night.—*Bailey.*
[比較:—Ask of thyself *what beauty is.—ibid.*]

殊に此形は "What is the matter?" の場合に多く用ひられる。例へば

My sister asked me *what was the matter.—Doyle.*

But the creature flapped and struggled, and out came my sister to know *what was the matter.—ibid.*

Sergeant Cuff darted softly out of my room, and asked *what was the matter.—Wilkie Collins.*

* 此の of the night は前行の of the great sun 同樣 Ask にかゝるのであ

尤も次の如き例もあるが現今は少ないと思ふ。

I will tell you *what the matter is* with you.—*Milton.*

170. 以上の例は凡そ叙實法の動詞を用ひた例であるが§157, 4に於ても言つた通り此場合の從文殊にif, whetherを連結とする場合には叙想法の現在又は過去(時の一致法に依り)を用ふる事が、現代に於ても可なり多くある。例へば

I ask her if she *love* me.—*Tennyson.*

But Silver, from the other boat, looked sharply over and called out to know if that *were* me.*—*Stevenson.*

Whether this *were* a vision, or what, he could not say.—*H. R. Haggard.*

尚最近の例は既に§157, 4に掲げたから玆には再せぬ。

III. 被傳達文が命令文なる場合

171. 此場合に特に注意すべきは次の諸點である。

(1) 原文の意味合に應じて傳達文句の動詞を to ask, to bid, to tell, to beg, to request, to entreat, to implore, to command, to order, to pray, to advise, to forbid 等に變ずる。

(2) 次に其命令文の元聽者を表はす名詞又は代名詞を

* 此 me が是認せらるべき事、及其由來につきては§130参照。

目的格として上記の動詞の次に置く。

(3) 被傳達文の動詞を to ある Infinitive (但 to bidに對しては to なき Infinitive)として之れを次に置く。

(4) 原文！あらば之れを去る。

例へば

He said to the man, "Shut the door!"
He bade the man shut the door.

He said to me, "Please shut the door,"
He asked me to shut the door.

I said to her, "Allow me to go."
I begged her to allow me to go.

He said to me by way of advice, "Do not go there."
He advised me not to go there.

She said to her husband, "Do spare that man his life!"
She implored her husband to spare that man's life.

He said to his friend, "Lend me your book, if you please."
He asked his friend to be kind enough to lend him his book.

(5) 又被傳達文中に從屬文句を伴ふ時は、其文句中の動詞は時の一致法に支配せられる。例へば

He said to me, "Wait here till I *return.*"
He told me to wait here till he *returned.*

{He said to the boy, "Do as I *did*."
{He ordered the boy to do as he *had done*

{He said to the man, "Don't stir out of the room before the clock *has* struck two."
{He advised the man not to stir out of the room before the clock *had* struck two.

172. 尤も此等の場合にも **that-文句**を用ふる事も出來る。而して其場合には叙想法現在又は假裝叙想法 should を用ふるは §157, I. 3 に說く所の如くである。例へば

They request that letters to the Editor *be* written on one side of the paper only.

If thou be the Son of God, command that these stones *be* made bread.—*Matthew*, iv. 3.

Therefore bid thy scribes that it *be* written down.
—*H. R. Haggard.*

斯くの如く叙想法現在を用ふる事は今日に於ては上例第一の如き形式を重んずる文、若しくは上例第三の如き壯重なる擬古體の文に限られ多くは should を用ふる。例へば

I command that you *should* act justly.

The Court declares that he *sholud* be set at liberty.
—*Dickens.*

而して此 should は元來叙想法過去の代用として用ひし（早くも古英語時代から）に起因するもので、現在の代用たらしむる現代の用法は全く其擴張である。されば叙想法の現在は上例に見る如く今日尙時ありてか用ひらるゝも、その過去は用ひらるゝ事稀有に屬し先づ大方は should を用ふる。例へば

Thou *didst* command that they *should** not enter into their congregation.—*Lamentations*, i. 10.

The president of Panama had strictly *ordered* that none *should* adventure to any of the Islands for plantations.—*Dampier.*

それだから時には叙想法現在の代りに shall を用ひた例もある。例へば

In humblest manner I require your highness
That it *shall* please you to declare.—*Shakespeare.*

それから又 **to pray, to implore** 等の場合には §157, I. 1. c 及び更らに遡りて §68, 1. b の場合と同樣の may (might) が用ひられる。無論叙想法現在もある。例へば

（叙想法現在）

The poor man 'mid his wants profound,

* 時の一致法に依る叙想法過去は疑を含む從文に於て現存して居る。§157 (4) 參照。

With all his little children round,

Prays God that winter *be* not long.—*Mary Howitt.*

(假裝叙想法現在 may)

I pray that we *may* never be exposed to such a temptation.—*Doyle.* (§ 174 參照)

(假裝叙想法過去 might)

An address was presented to the king, praying that Impey *might* be summoned home to answer for his misdeeds.—*Macaulay.*

又叙想法の餘芳殆んど失せたるに近き用法としては will (would) がある。今雅俗各一例を提出する。

I beg you'*ll* proceed.—*Goldsmith.*

And he entered into one of the ships, which was Simon's, and prayed him that he *would* thrust out a little from the land.—*Luke*, v. 3.

先づかくの如きが to pray, to implore 等の場合の現代の用法（叙想法現在の普通文に少なきは今更言ふまでもなからう）である。

尤も中古英語の時代には外の場合同様に should を用ひた事もあるが近代稀有の事と見てよろしい。而して有之るは多く打消のある場合である（此點に關して

は § 157, II. a 末項及 b "possible" の場合參照)。

例へば

I pray *not* that thou *shouldst* take them out of the world, but that thou *shouldst* keep them from the evil.
—*John*, xvii. 15.

IV. 被傳達文が感動文なる場合

173. 此場合特に注意すべきは

(1) 傳達動詞を to cry, to exclaim 等とし、場合によりては其文の意味に適合する樣なる修飾語句を附加する。

(2) 被傳達文に於てたとへ述語の主語に先立つ事ありとも、間叙に於ては主語を先にする。

(3) 被傳達文の how, what は連結として用ふる事もあり、用ひざる事もある。而してそれを用ひざる時は that を連結として入れる。

(4) 被傳達文の！は之れを去る。

例へば

He said, "Oh, what a disaster it is!"
He cried out what a disaster it was.

He said, "Alas! I am ruined!"
He cried out with a sigh that he was ruined.

He said, "Ah me! how foolish I've been!"
He confessed with regret that he had been very foolish.

They all cried out, "Bravo, a capital hit!"
They all shouted with applause that it was a capital hit.

He said, "To think that I should be mistaken!"
He expressed great surprise at finding himself mistaken.

V. 被傳達文が祈願文なる場合

174. 此場合は前記の命令文を傳達する場合と感動文を傳達する場合との混合したるものと見る事が出來る。故に場合により時に應じて種々の變更を必要とする。尙動詞の法に關しては § 172 の後半部參照。

He said, "God bless my child!"
He prayed that God might (又は would) bless his child.

He said, "O that I could see my father!"
He exclaimed that he wished he could see his father.

He said, "May you be happy!"
He expressed his hearty wishes for my welfare.

He said to them all, "Good-bye,* my friends!"
He said good-bye to all his friends.

* Go d-bye は God be with you の訛、*Hamlet*, II. 1. 67 參照。又屢々 Gol b'w'y; God buy you 等も見える。

VI. 被傳達文が合成文なる場合

175. 主語を異にする二箇以上の單一文が and, but にて連結せられたる合成文を間接叙法に依りて傳達する時は文句毎に that を用ふるを法とする。例へば

He said, "The boy will soon be found, and I will bring him."
He said *that* the boy would soon be found, and *that* he would bring him.

He said, "It has been raining since daybreak, but I am determined to go."
He said *that* it had been raining since daybreak, but *that* he was determined to go.

I told him *that* you were offended with me too, but *that* I, being a creature of pachydermatous hide, should call all the same.—*F. Warden.*

This witness further alleged *that* Mr. Landon had arrived from London that day; *that* he had gone to see Mr. Dax in the room of the latter, and *that* high words had passed between them.—*ibid.*

然し乍ら多くの場合に於ては原文の意義を咀嚼し、それを傳達者の立場より自由に改造して傳達する法が用ひられる。故に傳達文句を只一回丈け先に立て文句、文句、順を追ふて傳達する如きは文句の數の少ない時と見て差

支へない。時には隨分澤山の文句が上記の樣な工合に列ねてある事もあるが、それは特に何かの譯で以て種々の事を箇條別にして列記した場合で、普通の場合にはなるべく聲調よく工夫して文に變化をあらしめる。

又各文句の主語が同一である場合には上記の法に依る（上例最後の文の第一第二文句參照）か若しくは第二文句以下の that と主語とを併せ省略する。例へば

He said, "My friend arrived yesterday, and will start to-morrow."
He said that his friend had arrived yesterday, and (that he) would start to-morrow.

He said to me, "I have been three years in jail, but I am quite innocent."
He told me that he had been three years in jail, but (that he) was quite innocent.

玆に合成文中で特に注意すべきは連結が for* なる場合である。此場合間叙の文に於て for の次に that を附することはない。例へば

The coachman said he could not imagine what had become of him, *for* he had seen him get in with his own eyes.—*Doyle.*

* 此接續詞は昔は從屬接續詞としても用ひたが今日は對等接續詞として用ふるばかりである。§§ 200-1 參照。

VII. 被傳達文が重複文なる場合

176. 被傳達文が重複文なる時は、其の合成文なる時よりも更らに一層文の改造を必要とする場合が多い。然し簡單なる場合に關して其傳達動詞過去の時は凡そ次の方法を用ひて間接叙法の文をつくる（主文の變化は無論單一文の時に同じ）。

(1) 叙想法現在は叙想法過去とする。例へば

He said, "I do not know if this *be** so."
He said that he did not know if that *were** so.

He said, "If this *be*† so, I am much mistaken."
He said that if that *were*† so, he was much mistaken.

但し元來が上記の場合に於ては現今叙實法現在を代用する事が多いから、間叙の文に於ても叙實法過去を用ふる事の多きは言ふまでもない。乍然、此叙想法過去は時々想像せらるゝが如く現代英語に用ひないものではない（§ 178 Doyle の例文及 § 157, I. (4) 末項參照）。又叙想法過去の代りに should の用ひらるゝ事多き場合は § 172 に說きし通りである、故に次の如きも直叙間叙の一對である。

He said, "The Court declares that the man *be* hanged."
He said that the Court declared that the man *should be* hanged.

* § 157, I (4) 參照。† § 215 參照。

(2) 叙想法過去及び過去完了は變化しない。例へば

He said, "I could not tell whether it *were* a ghost."
He said that he could not tell whether it *were* a ghost.

但し此の如き場合に於ては現今叙實法の過去を用ふる事多きは再三說き來りし事なれば間叙の文に於ても叙實法過去を用ふる事あるは早や多く言ふを須ひない。又次の如きも忘れてはならない。

He said, "If I *were* a bird, I *would* soar high."
He said that if he *were* a bird, he *would* soar high.

(3) 元來は叙想法代用*のものと雖も shall は should に、will は would に、may は might に變ずる事叙實法の場合と異ならない。例へば

She said, "The king orders that he *shall* be punished.
She said that the king ordered that he *should* be punished.

He said to me, "I wish you *may*† be happy."
He said to me that he wished that I *might* be happy.

He said, "I study hard that I *may*‡ succeed.
He said that he studied hard that he *might* succeed.

* § 157, I (2) (3) 及び § 172 等參照。† § 157, I (1) c 參照。
‡ 此 may が元來叙想法代用たる事は § 204 參照。

(4) 叙實法の用ひられたる場合に於ては、其時に應じて一々變化するを法とすれ共、從屬文句の從屬文句（殊に副詞の用をなすもの）に於ては多くは過去の上に出ない。例へば

He said, "I am sorry for what I *have done*."
He said that he was sorry for what he *had done*.

He said, "All the world believe what she *said*."
He said that all the world believed what she *had said*.

He said, "I believe that the dog *is* still *watching* at this very moment where I *found* him as I *came* along."
He said that he believed that the dog *was* still *watching* at that very moment where he *had found* him as he *came* along.

VIII. 被傳達文が混成文なる場合

177. 玆に混成文と名付くるは § 25 に掲げし定義を稍擴張して各種の段落ある文が集まりたる文章をも同樣に取扱ふものたるを斷わつて置く。而して間叙の理論は既に說盡して、此場合には早や特別なる法則も規定も無いから只一例を擧げて參考に資するに止める。

直叙、When Solon and Periander were sitting together over their cups, Periander, finding that Solon was

more silent than usual, said :—"Is it for want of words, O Solon, that you are silent, or is it because you are a fool?" "A fool," said Solon in reply, "cannot be silent over his cups."

間叙 (a) Solon が傳達する時

When Periander and I were sitting together over our cups, he, finding me more silent than usual, asked me if I was (were*) silent for want of words, or if it was (were*) because I was a fool. I told him in reply that a fool could not be silent over his cups.

間叙 (b) Periander が傳達する時

When Solon and I were sitting together over our cups, I, finding him more silent than usual, asked if he was (were*) silent for want of words, or if it was (were*) because he was a fool. He told me in reply that no fool could be silent over his cups.

間叙 (c) 他の人が傳達する時

When Solon and Periander were sitting together over their cups, Periander, finding that Solon was more silent than usual, asked him whether he was (were*) silent for want of words, or whether it was (were*) because he was a fool. Solon told him in

* §157, 4 (p. 230) 及び §170 參照。

reply that a fool could not be silent over his cups.

178. 今此章を終ふるに當り添言して置かねばならぬ事がある。それは前にも言つた通り元來此の間接叙法なるものが極めて技巧的のもので自然のものではなく、上述の如き一定の形式に發達するまでには千餘年の星霜を閲し、幾多の困難と闘ひ、幾多の變遷を經て來た事であるから近代の英語に於ても種々の奇態を見る事があると云ふ事一、

例へば、次の例に於ては初め間叙法により後突然直叙法に移つて居る。

They told him that *they* were poor pilgrims going to Zion, but were led out of *their* way by a black man, clothed in white, who bid *us*, they said, follow him.

—*Bunyan.*

それからもう一つは斯の如き奇態ではないが次の如き直叙、間叙の中間に屬する二樣の文を見る事がある。此等も皆上記變遷の跡を物語るものである。

(1) He said, I am happy.

(2) He said that "he was happy."

例へば

(1) John bare witness of him, and cried, saying, *This* was he of whom I spake, *He* that cometh after me

is preferred before me: for he was before me.

—*John*, i, 15.

(2) But I grasped his hand, for the first time, and looking up to him, as he stood thoughtfully by me, whispered, that "I was happy."—*Miss Mulock.*

又別段印を附せざるため一寸人には氣付かれずして其實間接叙法になつて居る文は現今實に多い。前後の關係や動詞の時等によりて見分けらるべきものである。うつかりすると大なる誤解の基となるから讀書の際にはよく注意すべきである。次の例はやゝ長きに過ぎるけれ共、好例であるから引用する。Dr. Watson なる人が獨り客舍の一室にありて、頗る複雜にして容易に解決のつくべしとも思はれざる犯罪探偵事件に關し、思をこらして居た其當時の光景を、後年記述した事になつて居る。そして今此引用に於て假に［ ］の中に入れたる分は玆に云ふ間叙の體になつて居る。尙委しくは The Boscombe Valley Mystery (Adv. of Sherlock Holmes) 參照。

I rang the bell, and called for the weekly county paper, which contained a verbatim account of the inquest. In the surgeon's deposition it was stated that the posterior third of the left parietal bone and the left half of the occipital bone had been shattered by a

heavy blow from a blunt weapon. I marked the spot upon my own head. [Clearly such a blow must have been struck from behind. That was to some extent in favour of the accused, as when seen quarrelling he was face to face with his father. Still, it did not go for much, for the older man might have turned his back before the blow fell. Still, it might be worth while to call Holmes' attention to it. Then there was the peculiar dying reference to a rat. What could that mean? It could not be delirium. A man dying from a sudden blow does not commonly become delirious. No, it was more likely to be an attempt to explain how he met his fate. But what could it indicate?] I cudgelled my brains to find some possible explanation. [And then the incident of the grey cloth, seen by young McCarthy. If that were* true, the murderer must have dropped some part of his dress, presumably his overcoat, in his flight, and must have had the hardihood to return and carry it away at the instant when the son was kneeling with his back turned not a dozen paces off. What a tissue of mysteries and improbabilities

* § 176 參照。

the whole thing was !]—*Conan Doyle.*

第十七章 形容文句

179. 形容文句は既に § 32 に略示した通り從屬文句の一にして次の語を連結とし主要文句中の名詞又は名詞相當語又は其主文全體に結び形容詞の用をなすものである。

(1) 關係代名詞 who, which, what, whoever (又 whoso, whosoever), whatever (又 whatso, whatsoever), whichever (whichso, whichsoever), that. 例へば

He *who is virtuous* is wise ; he *who is wise* is good ; he *who is good* is happy.

The day *which opened brightly*, closed with violent storm.

Edison is an inventor *whose fame is world-wide.*

You may take *whichever you like.*

This is the same story *that I heard yesterday.*

**Whatever is*, is right.—Pope.

I am **what I was born to be.—Beaumont & Fletcher.*

* かくの如き文句を名詞文句と間違へる人があるが注意せなくてはならぬ。委しくは § 155 脚註參照、又古くは who も what の樣に先行詞なしに用ひた。例へば

Whom (=Those whom) the gods love die young.—*Byron.*
Who (=He who) steals my purse steals trash.—*Shakespeare.*
Who kindles a fire should put it out.—*S. Weyman.*

There is one likeness *without which our Custom-House portraits would be strangely incomplete.*

—*Hawthorne.*

此內 ever-文句（次に示す形容詞をも含む）より副詞文句が發展する（§ 186 參照）。

(2) 關係形容詞 which, what, whichever, whatever, etc.

例へば

You may go *which* way *you like.*

You may take *whichever* book *you like.*

Use *what* powers *you have.*

Whatever person *is appointed* must be satisfactory to the court.

Now a merchant may wear *what* boots *he pleases.*

—*Thackeray.*

(3) 關係副詞 when, while, where, whence, whither, whereat, whereof, whereon, etc., how, why, as.

例へば

The exact time *when the murder was committed* was never known.

I remember the house *where I was born.—Hood.*

The land *whence Scyld drifted in his magic boat* will never be known.

Infected be the air *whereon they ride.—Shakespeare.*

This is the way *how I managed it.*

I did that in the same way *as you had done before.*

此等の例を見れば此等の文句が副詞文句と相距る僅かに一歩なる事が分かるであらう。

(4) 擬關係代名詞 (Pseudo-Relative Pronoun) as, but, than. 例へば

Bees like the same odours *as we do.*

I have not from your eyes that show of love
As I was wont to have.—Shakespeare.

There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy.—ibid.

此 as, than は元來は夫々副詞、接續詞として比較の副詞文句を造るもの (§ 227) である。又 but は前置詞接續詞の用をなして此用法に變轉せしもので主要文句に打消ある時に、事實上 that ……not の意味に用ひられる。例へば

There was no one *but did his best.*

On the house-tops was no woman
But spat towards him and hissed.—*Macaulay.*

(5) 或從屬接續詞、例へば

The year *after Ashton left home* brought fresh

disaster.

The day *before you came* was stormy.

これも副詞文句と密接なる關係を持つて居る。

(6) 副詞代用の關係代名詞 that. 例へば

This is not the way *that* (=by which) *we came last time.*

In the day *that thou eatest thereof.—Genesis,* ii. 17.

It is past ten, and quite time *that we started.—Doyle.*

180. 關係代名詞は其先行詞と人稱、數に於て一致し、從つてそれが形容文句の主語たる時は其文句の述語は其先行詞と照合して確定せらるべきものである事は § 126 に於て說いた。而して次の如き反例を見る事、及び其起因も同時に詳說して置いたから玆に重ねて絮說する事はしない。此等は大抵言語心理よりすれば極めて自然の事ではあるが純文法よりは避けねばならぬ。

(1) This is the epoch of one of the most singular discoveries that *has* been made among men.—*Hume.*

(2) I am no orator, as Brutus is;
But, as you know me all, a plain blunt man,
That *love* my friend.—*Shakespeare.*

(3) Sing heavenly Muse, that on the secret top
Of Oreb, or of Sinai, *didst* inspire
That shepherd.—*Milton.*

(4) O Thou, my voice inspire

Who *touched* Isaiah's hallowed lips with fire.—*Pope.*

乍然同樣の原因より來るものなれ共 It is……の次に來る關係文句 (Relative Clause, 卽ち關係代名詞又は關係形容詞を連結とする形容文句) の述語は It is の補語と一致する。此事も § 127 に說明した所である。

181. 關係代名詞の格は其文句中に於ける役目如何によりて決すべきものなる事も旣に第十三章に於て傍說した (§ 142)。然し此事は玆に說く方が本當だから更らに附言して置く。

(1) There's Mr. Jones, *who* they declare is the richest man in this city.

これは正しい文である。who は is に對して主格でなければならぬ。然るに declare と云ふ動詞が近くにあるものだから、それに引かされて whom を用ふる樣な誤はよくある事である。例へば

One *whom* all the world knew was so wronged and unhappy.—*Miss Mulock.*

これは宜しく警むべきである。もし whom を主語とし生かさんとせば動詞を不定法にする。所謂不定法文句の用法である。* 例へば

* § 55 參照。尙詳細は第二十二章。

One *whom* all the world knew *to be* so wronged and unhappy.*

(2) They are a people *whom* it was not perfectly safe *to attack.*

これも斯くなくてはならぬ。卽ち whom は to attack の目的でなければならぬ。然るに it was が近くにあるものだから、其方に引かされて who を用ふる樣な例が珍らしくはない。例へば

The remaining place was engaged by a gentleman *who* they were to take up on the road.—*Thackeray.*

の如きもこれに近き反例である。

(3) He says he will give it to *whoever* shall earn it by a noble deed.

これも正に此通りでなくてはならぬ。whoever (=anyone who) であればこそ shall earn に對する主語の役目が勤まるのである。然るに兎もすれば to の方に引付けられて whomever の用ひらるる傾向がある。例へば

The same affinity will exert its energy on *whomsoever* is as noble as these men.—*Emerson.*

矢張り此用法は認容する事は出來ぬ。

* Wakwafi servant, *whom* I knew *to be* an excellent swimmer.
—*H. R. Haggard.*

182. 關係文句には二種の異なりたる種類がある。一ツは

Cats *that wear gloves* catch no mice.

の如く其修飾する名詞又は名詞相當語を確定する (define) ために必要缺くべからざるもので、もう一ツは

The old man brought two cats, *which scared away all the rats in the house.—Galsworthy.*

の如く其の修飾する名詞はそれ自身完全に或るものを指名し、從つて文はその關係文句なくとも些の故障なきものである。前者の如きものを**限定文句** (Restrictive Clause) と稱し、後者の如きものを**追叙文句** (Descriptive Clause) と名付ける。更らに數箇の例を示せば

限定文句	追叙文句
Give help to him *that needs it.*	I gave help to him, *who thanked me for my kindness.*
The servant *whom you discharged* has returned.	He discharged his servant, *who immediately left the house.*

(1) 限定文句

This is the house *that Jack built.*

All *that glitters* is not gold.

Nothing *that I have read* has moved me more than

the third act of "King Lear."—*Onions.*

We build the ladder *by which we rise.*

—*J. G. Holland.*

The memory of a great age is the most precious treasure *that a nation can possess.—Doyle.*

(2) 追叙文句

I went to view the river, *which I found greatly swollen.*

His story, *which made everybody laugh,* was often made to order.

Three sailors, *who were loitering on the pier,* sprang to his rescue.

I wrote to your brother, *who replied that you had not arrived.*

He heard that the bank had failed, *which was a sad blow to him.*

此最後の例に於て which は銀行の破産したと云ふ事全體を指すものである。それから追叙文句の關係代名詞は多く對等接續詞及び人稱代名詞（又は指示語）に書き換へる事が出來る。例へば

I went to view the river, *which* I found greatly swollen.=…… *and* I found *it*……

He heard that the bank had failed, *which* was a sad

blow to him.＝…*and that* was ..

の如くである*、それから追叙文句は主文と，を以て分ち、限定文句は此事なく直ちに主文につゞくを普通の法とする。尙次の二文を對照して見る事は有益であらう。

(1) In two of the instances *that* have come under my notice, the system has worked well.

(2) In two of the instances, *which* have come under my notice, the system has worked well.

前者は "Instances have come under my notice; and in two of these the syetem has worked well."

を意味し、後者は

"Two of the instances have come under my notice, and in those instances the system has worked well." を意味する。

183. 關係代名詞及び其用法は古來幾多の變遷を經たもので時代に依りて一樣でないが、其樣な事を一々說く必要はないから、現代語に於て吾人の指針となる所を主眼として言ふと先次の樣なものである。

---

* 卽ち、此の如き場合、全文は意義上合成文となる。又時には此の如き形容文句が意義上からは原因又は目的を表はす副詞文句相當のものたる事もある。例へば

The man, *who has been found guilty*, was severely punished.

Envoys were sent, *who should sue for peace*.

(1) 限定文句の場合。此場合には一體 that を適當とするのであるが、次の事は心得べき事である。

(a) 先行詞が人なる時は who を用ふる事が多い。但し

(i) 先行詞が who なる時は聲調を清くする爲め that を用ふる。例へば

Who that knows what men and women are would not have shrunk from that alternative.

—*A. Hope.*

(ii) 先行詞が the first, the last, the greatest 等、the only, the same 等を有する時は限定の意を强くすべき關係より that を用ふるがよい。例へば

She was one of the best and dearest creatures *that* ever lived.—*Thackeray.*

She was still the same person *that* she had been half an hour ago.—*Gerard.*

(iii) It is…, it was… の後にも (ii) と同樣の關係上 that を用ふる方がよろしい。例へば

It is he *that* ruined the Bourbons.

—*Thackeray.*

(b) 先行詞が指示語 that, those 等なるか、若しくは此を有する名詞なる時は現代に於ては who, which の方が宜しとせられて居る。例へば

That house *which* Jack built.

The third door was *that which* we were seeking.

Heaven helps *those who* help themselves.

尤も時には此等の場合に that を用ひた例もある（近代初期には殊に多い）。例へば

That that is is.—*Shakespeare.*

Those that we endured were more prolonged.

—*H. R. Haggard.*

又次の例は興味がある。

For just experience tells, in every soil,

That *those who* think must govern *those that* toil.

—*Goldsmith.*

(c) 關係代名詞が屬格（所有）なる時は whose 又は of which を用ふる。例へば

A child *whose parents* are dead is called an orphan.

A mountain *whose* summit（又は the summit *of which*, 又時には *of which* the summit) is covered with snow all the year round must necessarily be very high.

(d) 關係代名詞を前置詞の次に置く時は whom, which に限る。例へば

This is the man *of whom* I spoke.

That is the house *in which* he lives.

但し次の如くする時は that を用ふる事が出來る。

This is the man *that* (whom) I spoke *of*.

This is the house *that* (which) he lives *in*.

(2) 追叙文句の場合。此場合には who, which を用ふるを可とするが只一つ先行詞が人及び人以外のものを併せて居る時は that を用ふる。例へば

The car ran over a man and his dog, *that* were both instantly killed.

但し斯の如きは決して好ましきものではない故、成るべくは文を改造して避けるがよろしい。又次の如き文は珍らしくないが that と which とを交換するがよろしい。

The sandy strip along the coast is fed only by a few scanty streams, *that* furnish a remarkable contrast to the vast volumes of water *which* roll down the Eastern sides.—*Prescott.*

184. 關係代名詞の省略. 限定文句に於て關係代名詞が目的格なる時はそれを省略する事が多い。例へば

This is the man [that] I spoke of.

The only uneasiness [that] I felt was for my family.

—*Goldsmith.*

尤も文語に於ては此省略法は文の品位を損するものとして採用せられない場合が多い。此れ卽ち關係代名詞は此場合無き方が自然の言方で、之れを用ふるは一

種の技巧に過ぎない事を物語るもので吾人が §67 脚註に説明せし所と同様、實は省略にあらずして全然用ひざる古き自然に還りしものである。

尙ほ古文、詩及び口語に於ては主格たる關係代名詞を用ひざる場合がある。即ち

(1) There is, who is, that is 等にて始まる文に於て、例へば

There is no power in Venice
Can alter a decree established.—Shakespeare.

There's two or three of us
Have seen strange sights.—ibid.

Look you, here is a trout *will fill six reasonable bellies.—Isaak Walton.*

There's the two Miss Hoggs, and our neighbour Mrs. Grigsby, *go to take a month's polishing every winter.*
—Goldsmith.

What words are these *have fallen from me?*
—Tennyson.

It was the thought of them *made me pity her so.*
—Miss Mulock.

But what is it *makes the poor old thing so excited?*
—Mrs. Humphrey Ward.

(2) 前記の場合に於ては何れも中間にある名詞が主格

(主語又は補語として)であつたが、時には次の如く主文に於て目的たる例もある。

I have a brother *is condemned to die.—Shakespeare.*

I have a mind *presages.—ibid.*

I know a charm *shall make thee meek and tame.*
—Shelley.

I could make a thing *should frighten Vlaye.*
—S. Weyman.

(3) 從文に there is (are) 等を有する場合には品位ある文に於ても關係代名詞を用ひない。例へば

His table talk inspired the best biography *there is in English Literature.—Boswell.*

185. 先行詞の省略. 既に §179 脚註にも一言した通り詩及古文に於ては who の先行詞を省略する事も珍らしくない。例へば

Who builds a church to God, and not to Fame,
Will never mark the marble with his name *Pope.*

Who kills a man kills a reasonable creature.
—Milton.

Let *who* list open the door.—*Hawthorne.*

此用法は諺に於ても保存せられて居る。例へば

Who never climbs will never fall.

Whom the gods love, die young.

尙ほ次の如きは著しき例である。

There is a book *who runs may read.—Keble.*

(=There is a book *which he who runs may read.*)

186. 動詞の法. 形容文句には大抵叙實法を用ふる(時は其場合の意味合に依り主文と照合すれば自から明白である)が特に注意すべき場合を擧げると次の如くである。

(1) whoever, whatever, whichever 等の文句が既往の事にあらずして將來の事を表はす時は叙想法又は may (might), shall (should) を用ふる。例へば

He will succeed in whatever he *attempt.*

Do whatever *shall* seem good to you.

但し此場合普通文に於ては叙實法の代用せらるゝ事が多くある。例へば

Let him say whatever he *likes.*

それから § 179 に於て一寸一言添へて置いた通り此 ever-文句は最も普通に轉じて副詞文句の用をなし條件又は讓歩の意を表はす。而して其場合には叙想法又はその代用の may, might を用ふる事、純形容文句の場合に於けるよりも多い。例へば

Whatever you **do**, do it in earnest. (條件 § 218)

Whatever he **may** *have done*, he does not deserve

such punishment. (讓歩 § 221)

Whatever the cause **be**, that is not one of them.

Whatever you **may** *say*, I will not change my mind.

(2) 口語として極めて普通なる次の言方に於ては叙想法過去が用ひられる。これは現在の事實が當然の所期に反せる事を意味するものである。

I think perhaps it is almost time that I *prepared* for the new rôle I have to play.—*Doyle.*

It's time this lad *were* going about his own business.

—*Miss Mulock.*

187. 代用と短縮. 普通用ひらるゝものとして特に注意すべきは次の形である。

(1) He had nothing *to eat* (=that he *could eat*).

(2) He was the first man *to come* (=that came).

(3) It is time *for us to start* (=that we *should** *start*).

例へば

Mr. Snodgrass was the first man *to break the astonished silence.—Dickens.*

It is no time *for me to hide anything.—Doyle.*

此最後の例なる for…の言方は前節 (2) の叙想法過去を用ひし場合と相似たれ共、前者は現實に不滿足にて早く何々せねばと促し急ぐ心あるに、後者は只何々すべき時と言ふ程に過ぎずと思へばよろしい。

* 此 should も假想叙想法である事は前節と比較して見れば直に會得する事が出來るであらう。

It is time I *should* inform thee further.—*Shakespeare,*

第十八章　副詞文句——(其一)

188. 副詞文句は從屬文句の一で副詞の用をなすものであるが其意義形式が中々多い。故にこれを研究するには先づ分類する事が第一の要件である。今其意義によりて分類すれば次の八種となる。

I. 時の文句 (Temporal Clauses 又は Clauses of Time)

II. 場所の文句 (Local Clauses 又は Clauses of Place)

III. 理由の文句 (Causal Clauses 又は Clauses of Reason)

IV. 目的の文句 (Final Clauses 又は Clauses of Purpose)

V. 結果の文句 (Consecutive Clauses 又は Clauses of Result)

VI. 條件の文句 (Conditional Clauses 又は Clauses of Condition)

VII. 讓步の文句 (Concessive Clauses 又は Clauses of Concession)

VIII. 比較の文句 (Comparative Clauses 又は Clauses of Comparison)

今此分類に依り順次に說く事とする。

I. 時の文句

189. 時の文句は次の如き語句を連結とする。

when, whenever, while, whilst, as.

after, before, ere, till, until, since.

(as soon, so soon, as long, so long) as.

immediately (that), directly (that), once (that), now that.

the instant (that), the moment (that), the minute (that).

元來 after, before, till 等は前置詞で that を伴つたものであるが近代に於ては餘程其用法少なく、現代にては全く獨立して接續詞である。それから when, while, since も that (又 as) を伴つた事があるが、此も近代初期までと思はれる。又 immediately, directly 等には that を伴つた事と as を伴つた事とあるが現代にては多くは獨立させる。素より副詞であるが構文上從屬文句の先頭に立つて連結の用をなす。名詞 the instant, the moment 等も同樣の性質を有するものである。

190. 時の文句は其表はす時 (time) の如何によりて次の二種に分かつ事が出來る。

(1) 現在又は過去の事實に關するもの、此場合所用の動詞は叙實法である。例へば

When I first **came** *up to London,* I had rooms in Montague Street.—*Doyle.*

Whenever, on the other hand, *counsel for the defence* **came** *to a weak place,* the countenance of the Jew became brighter.—*Florence Warden.*

While we **condemn** *the politics,* we cannot but respect the principles, of the man.—*Prescott.*

Whilst I **was reading** *this afternoon* my thought strayed, and I found myself recalling a hillside in Suffolk.—*Gissing.*

The pilot grumbled, *as he* **cast** *his groggy eyes aloft.—Clark Russel.*

After the dance **was concluded** the whole party was entertained.—*Irving.*

Before I **was afflicted** I went astray.

—*Psalms,* cxix. 67.

After a lingering,—*ere she* **was** *aware,—*

The little innocent soul flitted away.—*Tennyson.*

Old furniture was waxed *till it* **shone** *like a mirror.*

—*Preston.*

We sat and talked *until the night,*

Descending, **filled** *the little room.—Longfellow.*

Twelve years are past *since we* **had** *tidings from him.—Wordsworth.*

As soon as he **saw** *Cedric's mother* he knew that the old Earl had made a great mistake in thinking her a vulgar, mercenary woman.—*Mrs. Burnett.*

Immediately this **was done,** I completed the arrangement with my publishers.—*Asa Gray.*

Directly he **stopped,** the coffin was removed by four men.—*Dickens.*

Now that those first giddy raptures **have subsided,** I have a quiet home-feeling of the blessedness of my condition.—*Lamb.*

The instant that we **heard** *it,* Holmes sprang from the bed.—*Doyle.*

The moment they **saw** *us,* they came ravaging and leaping at the bars as angry wave leaps against a rock.

—*H.R. Haggard.*

The minute Abel Fletcher **appeared,** John seemed to lose all his boyish fun.—*Miss Mulock.*

(2) 未來に關するもの。此場合には所用の動詞に三樣の式がある。(a) より (c) に及び順次近世の發達である。

(a) 叙想法現在を用ふる。但し現代には詩及び壯重の文に於ける外は多く用ひない。

O thou sword of the Lord, how long will it be *ere thou* be *quiet?—Jeremiah.* xlvii. 6.

This night *before the cock* crow, thou shalt deny me thrice.—*Matthew*, xxvi. 34.

He shall not fail nor be discouraged, *till he* have *set judgment in the earth.—Isaiah*, xlii. 4.

My heart is in the coffin there with Cæsar,
And I must pause *till it* come *back to me.*
—*Shakespeare.*

The tree will wither *before he* fall.—*Byron.*

.....like water slow dripping on a diamond that it cannot wear, *till they* be born *anew.—H.R. Haggard.*

又過去を基點としての未來は叙想法過去を用ふる筈なれ共、其例は近代英語には多からず、大方 (b) に示す通り should を代用する。尚此事項に關しては §172 を參照せば自から發明する所があるであらう。一例を示せば

He charged them that they should tell no man what things they had seen, *till the Son of Man* were *arisen from the dead.—Mark*, ix. 9.

(b) 人稱の區別なく shall (should) を用ふる。これ (a) の叙想法の代用にして未來を意味するより外何の意もない。今日文語としては此法が多く用ひられる。例へば

The sea will ebb and flow *as long as the earth* shall last.

When time shall serve, you shall have the fruit of my labours.—*Cowper.*

I'll fight to the last breath, *before they* shall take *my wife and son.—Mrs. Stowe.*

He determined to wait by the roadside, *until it* should be *light.—Borrow.*

He kept his heart cotinually open, and thus was sure to catch the blessing from on high, *when it* should come.—*Hawthorne.*

此の後の二例に於ける should は卽ち過去を基點とせる未來で (a) の末項に言ひし叙想法過去に相當するものである。

又此 shall が叙想法現在の代用に過ぎない事は次の二例を對比せば分かるであらう。第二例の go 及 pray は形の上では分からぬが叙想法たるは無論である。

Sit ye here, *while I* shall pray.—*Mark*, xiv. 32.

Sit ye here, *while I go and pray yonder.*

—*Matthew*, xxvi. 36.

(c) 然るに近代に至りては口語及び普通文體として**叙實法**を用ふるに至つた。即ち現今に於ては上記の如く

(a) I am waiting *till he* come.

(b) I am waiting *till he* shall come.

と言ふよりも、多くは

(c) I am waiting *till he* comes.

と言ふのである。此言方は近代初期より現はれて居る。今諸家の書中に例を求むれば

I fear he will prove the weeping philosopher *when he* grows *old.—Shakespeare.*

The instant they are put *into my possession,* you shall find me ready to make them and myself yours.

—*Goldsmith.*

Therefore you must visit him *as soon as he* comes.

—*Jane Austen.*

He may rail at Christmas *till he* dies.—*Dickens.*

We will drop into one of the Bond Street picture-galleries and fill in the time *until we* are *due at the hotel.—Doyle.*

これが即ち普通文法に副詞文句に於ては未來の代りに

現在を、未來完了の代りに現在完了を用ふと說かれてあるものゝ一部である。今現在完了の例を擧ぐれば

Come, Maudlin, sing the first part to the gentleman with a merry heart, and I'll sing the second, *when you* have done.—*Isaak Walton.*

Some pitying hand may find it there, *when I and my sorrow* are gone.*—*Dickens.*

此用法、即ち古英語以來近代初期の英語に至るまで叙想法を用ひて以て未來を表はせし場合に叙實法を代用する事は、上例の如く、現在を基點とする未來の場合に於て最も多く用ひられる法であるが、又過去を基點とする未來の場合にも用ひられる。例へば

He determined to resign *before the crash* came.

If I had had a dozen such lads as you, I would make knights of them *before I* died.—*Kingsley.*

但し此場合に於ては現今尙 (b) の should を用ふる事が盛である（上記 a の相當項參照、又此等の諸形式の比較は條件の文句に於ける場合を參照する事が有益である）。

* to be＋過去分詞は元來自動詞の現在完了として（獨逸語に於けるが如く）to have＋過去分詞より古き歷史を有するものである。現今に於ては多く廢れ、殘存してるのは往來を意味する動詞に於ける丈である。又to have＋過去分詞の形と共に用はるゝに至りてからはやゝ分業的考を持つ人も出來たが、これも矢張現在完了に相違はない（§154, 3 注意參照）。

191. 英語に於ては whenever が連結たる文句も、上記の諸語句を連結とする文句と同様の構造を有する。例へば

Whenever it *is* fine, I go for a walk.

Whenever he *fell* asleep, he had horrible dreams.

I shall go ahead, whenever I *start*.

但し此場合には may, might を用ふる事多き事丈けは特別の注意を要する（§196 參照）。例へば

It seems that it was no part of Hannibal's plan to engage the Romans whenever he *might* meet with them.—*Charles Merivale.*

192. 短縮. 時の文句は其主語が主文の主語と同一にして述語が連結動詞 to be なるか、若しくは此 to beを借りて成立せるものなる時、主語及びその to be が省略せられて短縮せらるゝ事は一般周知の事である。例へば

While [he was] young, he was not happy.

Here the goddess of the woods used to come when weary with hunting.—*Bulfinch.*

193. 俗語及び古體. 俗語に於ては ever が只意味を強むる外には何の謂はれもなく用ひられる。例へば

Come as soon as *ever* you are ready.

又蘇格蘭地方では whenever を as soon as の意味に用

ふるは最も普通の事である。例へば

I shall go out *whenever* I have had my dinner.

それから古體として§189 に一言したものゝ例を二三、近代英語中より擧げて置く。

Then take my soul; my body, soul, and all,
Before that England give the French the foil.
—*Shakespeare.*

When that the poor have cried, Cæsar hath wept.
—*ibid.*

When as in silks my Julia goes
Then, then (methinks) how sweetly flows
That liquifaction of her clothes.—*Herrick.*

II. 場所の文句

194. 場所の文句は次の如き語を連結とする。

where, wherever, wheresoever.

whence, whencesoever.

whither, whithersoever.

又古くは where that, where as などあつた事前の when の場合と同様である。

195. 此文句も矢張り次の二種類に分かれる。

(1) 其文句中に言表はさるゝ事柄が現在又は過去の事實なるもの、此場合に用ひらるゝ動詞は**叙實法**である。例へば

Remain *where you* **are**.

A monument stands *where they* **fell**.

Where **rolled** *the ocean*, thereon was his home.

—*Byron*.

Where'er I **came** I brought calamity.—*Tennyson*.

whence, whither は次の如き場合に用ひらるゝが、現代普通の文に於ては from where, (to) where を代用する事が多い。

Go back *whence you came*.

You may go *whither you will*.

(2) 其文句中に言表はさるゝ事柄が未來（過去を基點とする未來をも含む）に關するか又は時を定めず一般的なるもの。此場合には所用の動詞に二樣の式がある。

(a) 人稱の區別なく shall (should) を用ふる。此 shall (should) も元來は正に時の文句の (2) b に於けるもの (p. 308) と同一のもので未來を示す外何の意味もない。而して純粹の叙想法を用ふる事は此場合餘程古き以前に廢れて仕舞つたのである。今一例を示せば

Oh, cousin! thou hast led me *where I never* **Shall see** *day more*.—*Shirley*.

(b) 多くは叙實法を用ふる。例へば

Where your treasure **is**, there will your heart be also.—*Matthew*, vi. 21.

I will follow thee, *whithersoever thou* **goest**.

—*Matthew*, viii. 29.

Where thou **goest**, thither I will go.

—*H. R. Haggard*.

Wherever there **is** *an ascendant class*, a large portion of the morality of the country emanates from its class interests.—*Mill*.

196. ever-文句 卽ち wherever, whithersoever 等を連結とする文句も其構造普通の文句と同樣なるは上例にても知らるゝ所であるが、其未來又は不定の事に關するものは may, might を用ふる事 § 191 の場合と同樣である。例へば

Do your duty, *wherever you* **may** *be*.

He did his duty, *wherever he* **might** *be*.

197. 俗語及び古體. 時の文句の場合に when that のあつた如く where that が用ひられた時代がある。而して今日でも全くは亡びて居ないとの事である。がしかし Shakespeare には稀有 (Henry V. v. Prologue 17) の事で前の when that とは比較にならぬ。又 when as が用ひ

られた如くwhere as (又は whereas) も中古時代より近代初期までの間に時々用ひられた(沙、2 Henry VI. 1.2. 58)が今日は最早用ふる事がない (whereas=while は別)。

III. 理由の文句

198. 理由の文句は次の如き語句を連結とする。

because, since, as, inasmuch as, in that, for that, for.

此内 for that 及び for は今日は用ひられない。

199. 此文句に用ふる動詞は**叙實法**である。例へば

A lie is contemptible, chiefly *because it is cowardly.*
—*Reid.*

My strength is as the strength of ten,
Because my heart is pure.—*Tennyson.*

Woman's faith must be strong indeed *since thine has not yet failed.*—*Hawthorne.*

As the launch drew little water, we had no occasion to follow the circuitous channel.—*Froude.*

他の連結を含む例は以下三節に擧げる。

200. For that. 時に此形が because と同意に用ひられる。例へば

So death passed upon all men *for that* all have sinned.—*Romans*, v. 12.

And *for that* wine is dear,
We will be furnished with our own,
Which is bright and clear—*Cowper.*

但しこれは早や過去時代の遺物と云ふべきで今日は用ひない。然し for all that の形に於て讓歩の文句に轉じたものは今日でも用ひられて居る。例へば

For all that it was a cold night, the sweat was pouring down my face.—*Doyle.*

201. For. 元來此の for は前置詞で Anglo-Saxon に於ては for-thæm-the, for-thon-the, for-thy-the として接續の句を造つたもので何れも其成立は for-that-that である。此はじめの that は指示代名詞、後の that は關係代名詞で前の that を受けて居る構造である。然るに後には關係代名詞 the を失ひ又 thæm, thon, thy は何れも that に歸一せられて出來たものが前節の "for that" である。此の for that が更らに that を失ひて for は接續詞となるに至つた。それで古くは從屬接續詞として because と同樣に用ひられたものである、例へば

Why should this a desert be,
For it is unpeopled ?—*Shakespeare.*

然し乍ら、此用法は其後に至りて廢れ、極々稀に詩に於て之れを見るばかりである。例へば

And, *for* himself was of the greater state,
Being a king, he trusted his liege-lord
Would yield him this large honour all the more.
—*Tennyson.*

實際今日に於ては for は從屬接續詞としては決して用ひないと言って少しも差支へない。

202. 又理由の文句を導くものに次の如き句がある。

on the ground that
for the reason that

此場合 that 以下だけにつきて言はゞそれが名詞文句たる事は說明を須ひずして明白である、又かくの如く觀察すれば前記の for that も同樣其次に來るものは名詞文句、又 because も今日でこそ立派な接續詞であるが其成立の歷史を見れば by + cause で其次に of+名詞 又は that-文句を採つたもので、等しく名詞文句より脫化し來りたるものである。實際今日吾人の眼に映ずる近代初期の文書にも次の如きはさまで珍らしくはない。

……the Holy Ghost was not yet given; *because that* Jesus was not yet glorified.—*John*, vii. 39.

又古くは for why=because と云ふ句がある。例へば

He saw me nought (=not),
For-why he heng (=hung) his heed adoune (=head adown).—*Chaucer.*

これは正に for the reason that と同樣の構造に由來するもので because を意味する。今日俗語*に於て此れを why? と同樣疑問に用ふるは轉用であつて本來の意味ではない。

尙名詞文句より此方に進展し來るものには次の二形がある事を記して置き度い。

(1) **In that** †

Perhaps no one was more conscious of his worth than Peter himself, but in his case self-appreciation was a virtue, *in that* it inspired the confidence of his employers.—*A. & C. Askew.*

(2) **Considering that, Seeing that 等**

Then, *seeing that* the tears were in Thora's eyes, Aunt Margaret gave the girl's hair a softer smoothing.
—*Hall Caine.*

又 inasmuch as=because は元來比較の文句より發展し來りしものなる事は此語の形によりて自から明瞭である。

Inasmuch as ye have done it unto one of the least of

* But yet his horse was not whit
Inclin'd to tarry there;
For why?—his owner had a house
Full ten miles off, at Ware.—*Cowper.*

† § 156 (5) 參照。

these my brethren, ye have done it unto me.

—*Matthew*, xxv. 40.

IV. 目的の文句

203. 目的の文句は次の如き二種の連結を有する。

(1) that, so that, in order that.

(2) lest (=that……not).

此内第一種に屬する三つは其間に何等意味の差なく、又何れも極めて普通に用ひられる。

尙時々は to the end that, for the purpose that 等の句が用ひられる。

204. 古くは目的の文句には叙想法を用ひた(此點に關しては §157, I. 3-4 參照) もので、今日に於ても尙ほ詩及び壯重なる文(稀には普通文にも)に於て保存せられて居る。例へば

Ye shall not eat of it, neither shall ye touch it, *lest ye* **die**.—*Genesis*, iii. 3.

To act *that each to-morrow*

Find us farther than to-day.—Longfellow.

Lord God of Hosts, be with us yet,

Lest we **forget**, *lest we* **forget**.—*Kipling.*

然し乍ら叙想法の代用として助動詞を用ふる事は既に

古英語の時代より起つたもので、今日では次の如く用ひなされて居る。

(1) that を連結とするものは may, might を用ふる。而して此場合には名詞文句の場合に說いた通りの時の一致法が極めて嚴密に行はれて居る。例へば

We *will throw* our ballast overboard, that the airship *may* clear the tree-tops.

We *throw* our ballast overboard, that the airship *may* clear the tree-tops.

We *threw* our ballast overboard, that the airship *might* clear the tree-tops.

The life-blood of the slain

Poured out where thousands die *that one* **may** *reign.*

—*Bryant.*

I went bare-headed, *that the golden-beams* **might** *shed upon me their unstinted blessing.—Gissing.*

上記の如き例は一般周知の事で多く玆に例を揭ぐる必要はない事と信ずる。又稀には shall, should, can, could の用ひらるゝ事もある。例へば

He thought he would send him away for a while, so that he *should* not be made angry by constantly contrasting him with his brothers.—*Mrs. Burnett.*

又目的の文句が打消を含む場合も上記と同樣の構造を用ふる事が出來る。例へば

He studies hard *that* he *may not* fail.

He studied hard *that* he *might not* fail.

然し此場合には lest を用ふるが普通である。

(2) lest を連結とする時は主文の時如何に拘はらず should を用ふる事が現今最も普通なる法である。例へば

Climb we not too high,

Lest we **should fall** *too low.—Coleridge.*

但し此場合と雖も may, might が用ひられ得る事を忘れてはならぬ。例へば

How, how, Cordelia! mend your speech a little,

Lest you **may mar** *your fortunes.—Shakespeare.*

元來此語は that…not の意味であるから次の如き誤に陷らざる樣に注意せなければならぬ。

When a young man enters the world, he must take heed *lest he be not* ensnared by his companions into vicious practices.—*Crabb.*

205. For fear (that). 上記 lest の代りに屢此句が用ひられる。例へば

They'll ask no questions after him, *for fear* they

should be obliged to prosecute, and so get him logged.

—*Dickens.*

此場合、及び for the purpose that, to the end that 等を連結とする文句は、共に是亦名詞文句なる事論を俟たない。

206. 代用. 目的の文句は其主語が主文の主語と同一なる時、次の如き形を以て言替へる事が出來る。

(1) Dative Infinitive.

(2) in order + Dative Infinitive.

(3) so as + Dative Infinitive.

例へば

I come *to bury* Cæsar, not *to praise* him.

—*Shakespeare.*

Fools who came *to scoff* remained *to pray.*

—*Goldsmith.*

Now, *in order to deal* with words rightly, this is the habit you must form.—*Ruskin.*

又次の如きは形式上は上例と場合を異にして居るが常に用ひらるゝ所である。

It is my desire to be economical at home, *so as to make* a good show abroad.—*Doyle.*

All the house was arranged *so as to bring* him ease and give him pleasure.—*Thackeray.*

V. 結果の文句

207. 結果の文句は that を連結とし主文中の so 又は such と呼應する。例へば

When I see a bride crying *so* bitterly at the altar *that she can hardly utter the responses*, I generally know that she is going to be a happy wife.

—*Hall Caine.*

So intense was my delight in the beautiful world about me *that I forgot even myself.—Gissing.*

Just opposite the Wigmore Street Office they have teken up the pavement and thrown up some earth, which lies in *such* a way *that it is difficult to avoid treading in it in entering.—Doyle.*

又 so が上例に於けるが如く主文中の語を修飾する事なく從文の方に送られ so that なる連結を見る事がある。例へば

The drought lasted a long time, *so that* the grass was parched and the cattle died.

The snow lay very thick upon the ground, *so that* the road was lost to sight.

又次の例は特別の注意を値する。

The cider is *such* an enormous crop *that* it is sold at ten shillings per hogshead; *so that* a human creature may lose his reason for a penny.—*Sydney Smith.*

又次の例も特に吾人の注意を牽く。

Meanwhile the fog and darkness thickend *so, that* people ran about with flaring links.—*Dickens.*

208. 代用. 結果の文句は其主語が主文の主語と同一なる時、次の如き形を以て代用となす事が出來る。

(1) so… …as + Dative Infinitive.

(2) enough + Dative Infinitive.

例へば

He was so kind that he helped me.

= { 1. He was *so* kind *as to help* me.
  2. He was kind *enough to help* me.

但し玆に一つ注意すべきは so…as to… の文は前の如く文句を用ひし文よりも應用の範圍が廣いと云ふ一事である。即ち前記文句の文に於ては結果として示さるゝ事は全く事實有之し事柄であるが、so…as to…の文に於ては只に其の場合のみならず又一般不定の陳述ともなり得るのである。更らに具體的に言はゞ上例 that-文句の文は彼親切にして我を助け呉れし事實が存在する時にのみ用ひらるゝも、so kind as to help me の文は必ずし

もその場合のみに限らず、或は單に彼の親切の程度が我を助けん位であつたと云ふに過ぎぬかも知れないのである。故に吾人が結果として之れを將來に囑望するものを表はす場合には必ず此の so…as to…の構文を用ひなければならないのである。例へば

Good masters, as we go now towards London, be still *so* courteous *as to give* me more instructions.

—*Isaak Walton.*

209. 以上記する所によりて吾人は玆に二つの事實を明瞭に知るのである。一は結果の文句は目的の文句と殆んど全く同一のもので只其の主文に伴ひたる場合相互の意味の關係によりて何れともなるのであること正に吾人の腦裡に存する結果と目的との觀念が其觀察の方向を異にするに過ぎないのに一致して居ると云ふ事、も一つは此の結果の文句なるものが比較、衡量と云ふ觀念を表はすものと極めて密接なる關係を有すると云ふ事である。成程今日の英語に於ては比較を表はすものは so (as) …as, such…as (§227 參照) で結果を表はすものは上記の如く so…that, such…that であるけれ共、少しく年代を溯ると矢張り近代英語の範圍内に於て as を結果の文句の連結とした例がいくらもある。例へば

He raised a sigh *so* pitious and profound

As it did seem to shatter all his bulk.—*Shakespeare.*

She complied in a manner *so* exquisitely pathetical *as* moved me.—*Goldsmith.*

それから、打消の結果の文句の代用として too…to の形があるが此も比較の文句と密接なる關係がある。即ち

He is too wise to do this.

の to は前節の enough to の to と共に比較を意味するものと考へられる。尙此形につきては面白き事實があるから節を更めて說く。

210. 舊約聖書の Isaiah, xxviii. 20 に次の文がある。

For the bed is *shorter than* that a man can stretch himself on it: and the covering *narrower than* that he can wrap himself in it.

此れは極めて珍らしき例の一ッであるが現代語に書き更らたむれば

For the bed is *too* short for a man *to* stretch himself on it: and the covering is *too* narrow for him *to* wrap himself in it.

である。此珍らしき言方の由來は吾人不幸にして未だ確實なる事を知らないが、兎に角 too…to の形は一方結果の文句の代用たると同時に又比較の文句に通ずるものである事は充分に認めらるゝ事と思ふ。尙此言方を獨逸及

び拉丁の兩國語と比較して見ると面白いと考へるから記して置く。

英:—He is too wise to do this.

獨:—Er ist zu klug, als dass er dies täte.

(=He is too wise, than that he this should-do.)

拉:—Prudentior est quam ut hoc faciat.

(=Wiser he-is than that this he-should-do.)

尙ほ英語の言方は佛蘭西語の Il est trop prudent pour faire ceci と同一である。

第十九章 副詞文句——(其二)

VI. 條件の文句

211. 條件の文句は次の如き語句を連結とする。

if (古 if that), unless (=if…not).

on condition (that), in case (that).

supposing (that).

provided (that), granted (that).

an, an if, and, and if (古)

but, except, without (古)

so, so that (古、俗)

as long as (俗)

尙此外に whatever, whichever, however 等。

連結は如斯多數あるけれ共多くが他の文句より進展し來りしものである事は一見して分かる。委しくは後に讓り今其代表者たる if のみに依りて研究の歩を進める事とする。「偖條件の文句卽ち **if-文句**は或事を前提して、若しその前提にして成立するならば斯々然々の結果に逢着すと云ふ事を述べ玆に始めて或一箇の完全なる思想の發表となるものである。」如斯く二ッの部分を具備したる文を **條件文** (Conditional Sentence) と云ふ。而して其條件を提出する部分卽ち條件の文句をば特に其文の **前提** (Protasis) と呼び、結末の文句をは特に **歸結** (Apodosis) と名付ける。

212. 條件の文句は一見其形式雜多の樣であるが其條件の性質によりて分類すれば次の三種に歸する。

(I) 第一種、或る事實若しくは一般論として或事を前提し歸結を呼ぶもの

(II) 第二種、事實にあらざる事、若しくは事實にあるべからずと想定せらるゝ事を前提し歸結を呼ぶもの

(III) 第三種、言者疑はしと思ふ事を前提して歸結を呼ぶもの

(I) 第一種に屬する條件の文句

213. 此種類に屬するものを更らに委しく言はゞ凡そ次の三種となる。(1) 事實を前提とするもの (2) 言者に於て當否、眞僞少しも相關せず或事を前提とするもの、(3) 一般の論理の前提たるもの。此等の場合、前提の動詞は凡て叙實法を採り、只現在の動詞が未來に關する事を表はす外、動詞の示す事柄の時 (time) は動詞の時 (tense) のまゝである。而してこれに對する歸結は其意味に應じ如何なる形式を採る事も自由である。

今數箇の例を示せば

(現在) *If this* **is** *true*, that is false.

If it **is raining**, shut the window.

If you **are** *angry with anybody*, you will repent it soon.

If that **is** *a diamond*, why are you so careless about it?

(過去) *If this* **was** *true*, that was false.

If it **was raining**, why did you not shut the window?

If you **were** *angry with anybody*, what a foolish fellow you are!

If that **was** *a diamond*, go and look for it.

(未來) *If this* **proves** *to be true*, I shall be surprised.

If it **rains** *to-morrow*, I will not go.

If you **are** *angry with anybody*, count ten before you say that you are.

If that **turns** *out to be a diamond*, why, what a prize it will be!

上例を見て直ちに氣付く事は未來にも現在にも同樣に現在動詞を用ふるを以て或場合には文の意義不明なるを免かれざる事である。例へば If you *are* angry with anybody は果して現在の事を意味するや、たゞしは未來に關するものなりや、その文句自身に於ては全く決定する事が出來ぬのである。かういふ不都合は英語のみならず獨語、佛語などにも存する事であるが、實際の場合になれば前後の關係、其用ひらるゝ時の事情等によりて充分その區別のつくのが普通である。

尙少しく例を擧げる

(1) 事實を前提するもの

(現在) Don't call me 'sir'; *if I say 'John,'* why don't you say 'Phineas'?—*Miss Mulock.*

(過去) You must not think me rude *if I passed you without a word*, my dear young lady. I was preoccupied with business matters.—*Doyle.*

(2) 言者眞僞當否に關しては少しも關せざる前提

(現在) *If you are well up in London,* you will know that the office of the company is in Fresno-street.—*Doyle.*

(過去) Why, *if thou never wast at court,* thou never sawest good manners; *if thou never sawest good manners,* then thy manners must be wicked.

—*Shakespeare.*

(未來) *If,* in half an hour from this, *you still insist on my leaving the house,* I'll accept your ladyship's dismissal.—*Wilkie Collins.*

(3) 一般論理の前提

If you give only half your mind to what you are doing, it will cost you twice as much labour.

—*Lord Avebury.*

更らに數箇の雜例を擧ぐれば

If you have tears, prepare to shed them now:

—*Shakespeare.*

I can wish you no better lot than to have a wife and children. *If you are prosperous,* there they are to share your prosperity.—*Irving.*

If he objects to my company, it's easy to say so.

—*Miss Mulock.*

There must be no cowardly selfishness, no faint-hearted despair. *If we've got to die,* we'll die.

—*J. K. Jerome.*

In that case I think it is probable that no further step may be taken. *If you are found again,* then all must come out.—*Doyle.*

此の內未來に關するものに現在を用ふるは普通文法に敎ふるかの代用法の一部である (§ 190, 2. c 參照)。それから此場合も遠き昔に溯れば矢張り叙想法を用ひたもので、丁度時の文句の場合に見た通りの變遷の經て發達し來りしもので其間には shall を用ひた事もあり、又現代と雖もやゝ改まりたる文章に於て保存せられて居る事時の文句の場合と少しも異ならない (§ 190, 2. b 參照)。

例へば

If this new purpose of conquest *shall* be abandoned, Richard may yet become King of Jerusalem by compact.—*Scott.*

此 shall は人稱の如何に拘はらず未來の記號である。故に條件の文句に於て will を用ふれば其主語の人稱如何に拘はらず、其主語に表はさるゝ人の意志、決心、希望、等を示すものである。例へば

If you *will* take the trouble to turn into the field

which borders the trench, take the footpath to the left.
—*Dickens.*

同様に can, may 等も夫々其叙實法の資格にて此文句に用ひられる。例へば

If you *can* enjoy it in peace, well and good!—*Doyle.*

If I *may* be allowed to illustrate my state of mind by such an example, I should say that I was exactly in the condition of the elder Mr. Wallet.—*Dickens.*

(II) 第二種に屬する條件の文句

214. 此種の條件の文句が言表はす事を更らに委しく言はゞ次の三様となる。

(1) 現在の事實にあらざる事を前提とするもの

(2) 過去の事實にあらざる事を前提とするもの

(3) 未來に關し、殆んど事實となり得べからずと思はるゝか、少くとも甚だしく疑はしと思はるゝ事を前提とするもの。

而して此場合に前提は各順に

(1) 叙想法過去

(2) 叙想法過去完了

(3) 叙想法過去、又は were＋Dative Infinitive の形を採り、其の歸結は夫々

(1) would, should, could, might, etc.＋Infinitive (又は場合に依り Perfect Infinitive).

(2) would, shoud, could, might, etc.＋Perfect Infinitive (又は場合に依り Infinitive).

(3) would, should, could, might, etc.＋Infinitive.

の形を採る。尤も現代英語に於ては叙想法過去 were の外殆んど凡て此場合に適用せらるゝ叙想法の特別なる形態がないけれ共、其意味する事柄の時 (time) と其の動詞の形の示す時 (tense) とがいつも異なつて居るのを見ればたとへ言語の歴史を知らずとも其叙實法にあらざる事は明白になるのである。

今數箇の例を示せば

(1) 現在の事實にあらざる前提を有するもの

If he **did** *this*, he **would** *sin.*

If I **were** *you*, I **would** not *do* this.

If John **were** *in this assembly*, I **should have recognized** him before this.

(2) 過去の事實にあらざる前提を有するもの

If he **had done** *this*, he **would have sinned.**

If I **had offended** *him*, I **should have regretted** it.

If I **had taken** *your advice*, I **should be** happier now.

(3) 未來に關し殆んど事實あり得べからずと思はるゝか、若しくは頗る疑はしと思はるゝ事を前提とするもの

(a) *If he* **did** *this*, he **would sin.**

If he **came**, I **would see** him.

(b) *If he* **were to do** *this*, he **would sin.**

If he **were to come**, I **should be** glad to see him.

If the sun **were to rise** in the west, how surprised my sun-flower **would be!**

偖、茲に注意すべきは次の四事項である。

(a) 上例 (1) (3) を見れば兩者共 If he *did* this, he *would sin* なる文を見る。これ正に第一種の場合に於て吾人が注目せし所と同樣の現象で、等しく獨佛の諸語にも此奇觀あるを免かれない。然し乍ら實際に用ふる場合に於ては前說の通り (§ 213) 先づ差支へを生ぜないのである。

(b) 前提が叙想法過去ならば歸結は would, should, etc. +Infinitive 前提が叙想法過去完了ならば歸結は would, should, etc. + Perfect Infinitive に限ると思ふ人が間々あるかに考へるが、若しそうとすればそれは誤解である。

前提に言ふ事柄の關する時 (time) と、歸結に言ふ事柄の關する時との異同に依りて兩者相交換され得る事を注意せねばならぬ (上例 1. 2. の三番を見たらば說明を俟たずして明瞭であらう)。

(c) 此種の前提は歸結に命令文を採る事がない。

(d) 此種の前提は述語を先頭に立て連結を省略する事が出來る。例へば

If I were a bird = *Were* I a bird

If I had done this = *Had* I done this

If he were to come = *Were* he to come

今少しく例を擧げて見る。

(1) 前提が現在に關するもの

If I **were** you, sir, I *would ride* straight away with it to Frizinghall.—*Wilkie Collins.*

If my voice **had** any authority, I *would cry* this truth aloud wherever man could hear.—*Gissing.*

Were we not very strong, it **could** never **have been** done.—*H. R. Haggard.*

(2) 前提が過去に關するもの

If the people of Liverpool **had been** properly sensible of what was due to Mr. Roscoe and themselves, his library *would* never *have been* sold.—*Irving.*

Had he ***been*** on deck, he *could* no longer so much as *have pretended* not to understand the situation.

—*Stevenson.*

If it ***had*** not ***been*** for Miss Harrison here and for the doctor's care, I ***should*** not ***be*** speaking to you now.—*Doyle.*

(3) 前提が未來に關するもの

So long I certainly shall not live, but, if I ***did***, even so long *should* I *have* the wherewithal to pay my rent and buy my food.—*Gissing.*

We guard our secret very jealously, and if it once ***became*** known that we had hydraulic engineers coming to our little house, it *would* soon *rouse* inquiry, and then if the facts ***came*** out, it *would be* good-bye to any chance of getting these fields.—*Doyle.*

If I ***were to go*** among the people in my name, most of them *would try* to borrow or steal from me.

—*Sir Walter Besant.*

尙ほ此項を終るに先立ち一言せなければならぬ事は、古くは歸結の would be の代りに *were* を、would have の代りに *had* を用ひた事である。實際此 would be や would have は今日屢々條件法 (Conditional Mood) と稱

せらるゝが、これも矢張叙想法に外ならないのである。其論はしばらく措き兎に角古文には were, had が用ひられたので今日普通の論文體などにも保存（殊に were の方が）せられて居る。今此用法の例を擧げると

If thou hadst been here, my brother *had* not died.

—*John*, xi. 21.

Were I Brutus,

And Brutus Antony, there *were* an Antony

*Would ruffle up your spirits.—*Shakespeare.*

It *were* well, if we stripped Madam Hester's rich gown off her dainty shoulders.—*Hawthorne.*

(III) 第三種に屬する條件の文句

215. 此種の條件の文句は叙想法の現在、過去、又は假裝叙想法 should を述語とし、何れも言者が疑念を抱く事か、若しくは單純なる想像として或る事を前提とするものである。而して此各の形式が表はす時 (time) は次の如くである。

(1) **叙想法現在**の形 ……現在、又は未來 (§ 213 參照)

(2) **叙想法過去**の形……過去、又は未來 (§§ 213-4 參照)

(3) **Should + Infinitive** の形……未來又は現在

* =*who* would § 184 參照。

例へば

(1) *If this* **be** *so*, we are all at fault.

If it **rain** *to-morrow*, I shall not go.

(2) *If this* **were** *so*, why, we all have made mistakes.

(3) *If it* **should rain** *to-morrow*, we should be obliged to stay at home.

If anybody **should come**, say I am not at home.

尙數箇の例を擧げる

(1) *If thou* **read** *this*, O Cæsar, thou mayest live.

—*Shakespeare.*

If he **be** *so young*, so handsome, so……I believe he'll do still.—*Goldsmith.*

If it [=your literary work] **come** *from on high*, with what decency do you fret and fume because it is not paid for in heavy cash?—*Gissing.*

(2) *If it* **were** *so*, it was a grievous fault,

And grievously hath Cæsar answered it.

—*Shakespeare.*

If ever I **were** *traitor*,

My name be blotted from the book of life.—*ibid.*

That woman, *if woman she* **were**, lit a fire in my

heart which will not burn out.—*H. R. Haggard.*

(3) 'Tis good you know not that you are his heirs;

For, *if you* **should**, O, what would come of it!

—*Shakespeare.*

Should *such an* one* **gain** *her favour*, Rassen thinks it would mean his death.—*H. R. Haggard.*

Should *I never* **come** *back*, some chance wanderer may one day find them and post them to you, and you will know.—*J. K. Jerome.*

此の第三の形 should は §213 の終りに說いた shall の如く人稱の別なく未來を示す叙想法である。故に if-文句の would は先に說いた will と同樣人稱の別なく意志、決心、希望等を現はす叙想法である。例へば

If you *would*, you could.

同樣に could, might は can, may の叙想法たる資格に於て條件の文句に用ひられる。例へば

If I *could* work my will, every idiot who goes about with 'Merry Christmas' on his lips, should be boiled with his own pudding, and buried with a stake of holly through his heart.—*Dickens.*

* one の前に an を付ける事は普通ではないが、現代でも必しも稀有ではない。市河三喜氏「英文法研究」pp. 1-7 參照。

And if I *might* advise, it would be that we give that game over and play one by ourselves in which there really is something to be got.—*Sir Walter Besant.*

* * * * *

216. 玆に條件の文句全體につきて問題となり得る事がある。そは第一種、現在が未來を示す時、例へば

If it *rains* to-morrow, I will not go. ……(a)

の如きと、第三種、現在が未來を示す時、例へば

If it *rain* to-morrow, I will not go. ……(b)

の如きと、第三種、should を用ふる場合、例へば

If it *should rain* to-morrow, I would not go. ……(c)

と如きと、第二種の未來形、例へば

If it *rained* to-morrow, I would not go. ……(d)

If it *were to rain* to-morrow, I would not go. ……(e)

との間の差別如何である。一般的に言はゞ各種凡そ前記の如き意味、心持の區別を有すれ共、場合に依りては某々の兩者が著しく相接近し其間意味の相違を認むる事能はざる事のあるは蓋し自然の數と言はねばならぬ。而して上例 (a) と (b) とは時の文句の場合に於ける叙實法現在と叙想法現在とが何等差異なき (§ 190, 2. c 參照) と同樣、何等的確なる別なきものと認める。又 (c) (d) (e) も同

樣の關係よりして先づ的確なる區別の存在せざるものと認めざるを得ない。而して實際用ひられたる文章の場合に於て此等の形式の間に區別ありとすれば、それは其中に言表はす事柄の性質、其文の用ひられたる場合の情況、及び口語ならば其の口調（例へば If it should rain と If it *should* rain とには大なる差異がある）等に依りて生ずるものと見るが最も公平なる觀察であると信ずる。

217. 反例. 條件の文句に關する一斑は以上で說き盡した。が併し上記の條々は言はゞ條件の文句の型と謂ふべきもので實際に於ては色々變則なる形が用ひられて居る事があるを忘れてはならぬ。其內最も多いのは恐らく第二種の條件の文句に were を用ふべき場合に was を用ふる事であらう。例へば

As things are now, if I *was* in your place, I should be at my wits' end.—*Wilkie Collins.*

吾人はかゝる形に倣はぬ方がよい。然しこれは英語一般の趨勢と一致して居るもので又事實上多く差支へを生ぜない事丈けは充分認めねばならぬ（實際外の動詞に於ては過去に叙想法と叙實法との形態上の別はない、過去完了に至りては全くない）。然るに時には此の趨勢と逆行して叙實法が定例となつてる場合に叙想法を用ひたる事もある。例へば

At that part of the afternoon, if it *were* summer time, the younger members of the staff could be observed standing upon tables in the packing room, hanging tin-kettles over gas-jets. If it *were* winter they would turn their attention to the fires.—*Niven.*」

218. 各種の連結.

(1) **unless** (=if……not)

Unless it is reached instantly you and she can never leave the cove.—*Watts-Dunton.*

They can't be happy *unless* they are meeting one another.—*Hughes.*

(2) **on condition (that), in case (that)**

此二ッは if と同様の意に、未來の場合に用ひられる。例へば

I will permit you to go, *on condition* (that) you come back before dark.

I will go *in case* (that) it does not rain.

而して元來 that 以下の文句は名詞文句で夫々 condition 又は case と同格の地位にある (§ 156, 6) 事、理由の文句、目的の文句の或連結の場合 (§§ 202, 203, 205 等參照) と同様である。

(3) **supposing (that)** 此も that 以下は名詞文句で現在

分詞なる supposing の目的たる事、理由の文句の場合の seeing that 等 (202, 2) と同様の構造である。例へば

Supposing (that) it rains, what shall we do?

Supposing (that) it rain, what shall we do?

Supposing (that) it rained, what should we do?

又命令法の suppose も同様に用ひられる。例へば

Suppose I should lend you the chariot, what would you do?—*Bulfinch.*

(4) **provided (that), granted (that).**

此二者につゞく文句は名詞文句で、元來は (being) provided, (being) granted に對する意味上の主語で所謂遊離主格 (Nominative Absolute) の位地にあるものが轉置によりて斯の如き構文を生じたのである。尙此事は第二十一章末節に說く。

Provided your education had been a little less limited, I should have been glad to see you here.

—*Geo. Borrow.*

Granted (that) he is honest, will you employ him at once?

以上は今日最も普通に、且品位ある文に於ても用ひらるゝ所である。以下は古く用ひたものであるが近代初期の書物にもあり、又多くは地方言、俗語の中に保存せら

れ、從つて吾人が普通讀書の際にも遭遇する所であるから、承知して置く必要がある。

(5) if that=if

If that her breath will mist or stain the stone,
Why, she lives.—*Shakespeare.*

(6) and, an, and if, an if=if

and は中古英語に於ては if の意に用ひられた (an も同語で前者も an と發音せらるゝ事が多い)が後に至り此 and の此意義が忘れられ初めた頃 if を添へて and if を生じたのである。今日尙俗語に用ひられる。例を示せば

Ask what ye will and ye shall have it, *and* it lie in my power to give it.—*Malory.*

But *and if* that evil servant shall say in his heart...
—*Matthew*, xxiv. 48.

I could save myself, *an* I would.—*Malory.*

Up and help me *an* thou beest a man.—*Scott.*

(7) but, except, without=unless

And, *but* she spoke it dying, I would not Believe her lips.—*Shakespeare.*

Except a man be born again, he cannot see the Kingdom of God.—*John*, iii. 3.

Without ye take heed betimes, they purpose to put

you out of your realm.—*Lord Berners.*

(8) so, so that=if only

I am content *so* thou wilt have it so.—*Shakespeare.*

It involves the devotion of all my energies, ...but that is nothing, *so that* it succeeds.—*Dickens.*

此の so that は現今口語に於ては隨分廣く用ひられて居る。

(9) as long as=if only

此も俗語として今日多く用ひられて居る。例へば

Why, of course, now *as long as* we die we'll be with mother again.—*Doyle.*

219. Ever-文句. 條件の意は屢々-ever の語を含む文句を以て言表はされる。例へば

Whatever you do, do it in earnest.

(=If you do anything...)

Whoever shall offend, shall be punished.

(=If anyone shall offend...)

Whosoever therefore shall confess me before men, him will I confess also before my Father *which is in heaven.—*Matthew*, x. 32.

---

* p. 175 脚註參照。

此點に於て條件の文句は形容文句と境を接して居る(§ 186 參照)。

220. 短縮. 時の文句に於けるが如く (§ 192) 又讓歩の文句に於けると同樣(§ 226)、屢々主語及び to be が省略せられて短縮文を見る。例へば

If [it is] necessary, I will do so.

If [it were] possible, I would do so.

If [it is] so, I am surprised.

尙更らに多くの語を省きて短縮文を用ふる事がある。例へば

Correct errors, if [there are] any.

Have you any questions to ask me? If not, let us go on.

If any, speak; for him have I offended.—*Shakespeare.*

If so, it is a serious case.—*Doyle.*

221. 代用. 代用には凡そ二種類ある。

(1) 他の文又は文句に依るもの。最も普通には命令文と接續詞とに依る。例へば

Press the button, and the bell will ring.

Try to realize all the blessings you have, and you will find perhaps that they are more than you suppose.

—*Lord Avebury.*

Stand by your guns, or the enemy will.—*ibid.*

又次の如きも特に注目に値する。

As to such trifles as the tint and device of the wall-paper, I confess my indifference; *be the walls only unobtrusive, and* I am satisfied.—*Gissing.*

これは叙想法現在の命令文で現今多くは let を以て表はす形である (§ 61 參照)。

又叙述文、疑問文を以ても條件の意を表はす事が出來る。例へば

We take the receiver from the hook, and the operator answers.

Do you refuse? Then you must take the consequence.

(2) 句に依るもの

We cannot live *without water.*

But for you, I should have *drowned.

Without hope I shall quite go mad.—*H. R. Haggard.*

But for him, it never would have taken place.

—*Thackeray.*

If you are curious to know what course I took under the circumstances, I beg to inform you that I did what you would probably have done *in my place.*

—*Wilkie Collins.*

* § 144 注意 3 參照。

勿論場合によりては此等の條件を表はすものが其場の事情に依りて全く不必要となり全然省略せらるゝ事がある。例へば

She is old and foolish, and I *could* easily get her out of the way [if I wished.]—*Doyle.*

日常普通に用ふる I should like, I should say, I should think, It would seem 等皆此の部類より出でたる用法である。

又此と反對に條件の文句のみが存して一種の感動文又は祈願文となる事は既に知る所である (§69 參照)。

O were I but there!

If the children could only remain children!

—*Hall Cain.*

If I had a son worthy the name!—*S. Weyman.*

第二十章 副詞文句——(其三)

VII. 讓步の文句

222. 讓步の文句は前章說きし條件の文句と最も密接なる關係を有し、次の語句を連結とする。

if, even if.

whether……or(=either if……or if)

though, although.

as.

albeit (古)

尙此外に however, whatever, whichever 等があるが此等自身は形容文句である事は既に說いた通りである (§179, §186, §219 參照)。今數箇の例を示せば

If he is young, he is learned.

I will not stop here, *if I be killed.*

Even if it should rain, I am determined to go.

Though he is poor, he is honest.

Young as he is, he is wise.

Whether he goes or stays, he must pay a week's board.

However poor he may be, he can yet be happy.

Whatever he may have done, he does not deserve such punishment.

Whichever way you take, you must be prepared to meet some danger.

223. 此場合も條件の文句の場合と同樣叙實法の動詞を用ふる時と叙想法又はその代用たる助動詞を用ふる時の兩樣がある。卽ち

(1) 現在又は過去の事實を認容するものは叙實法を用ふる。例へば

Though you are *young*, you talk like an old man.

Young as you **are**, you talk like an old man.

Though he **was** *only a boy*, they looked to him as their leader.

Few though they **were**, the English fought bravely.

Though I **was** *sufficiently mortified*, my greatest struggle was to come.—*Goldsmith.*

Though I **am** *the youngest*, I'm the tallest.

—*Jane Austen.*

Her height was under rather than over the average height of women, and *if her face* **was** *not beautiful* it produced the effect of beauty, being one of those soft-featured faces which have a smile always playing upon them.—*Hall Caine.*

Silent as he **was**, I knew perfectly well what it was over which he was brooding.—*Doyle.*

(2) 未來（過去を基點とする未來をも含む）の事、又は單純なる想像を表はすものは次の如く、叙想法又は叙想法代用の助動詞を用ふる。

(a) 叙想法を用ふるは歴史上最も古き形であつて而も今日尚多く用ひられる。例へば

Even if you **were** *a king*, you would find somebody or something more powerful than yourself.

Whatever the cause **be**, the author has hardly done justice to his subject.

Murder, *though it* **have** *no tongue*, will out.

—*Shakespeare.*

Hester, *though he* **were** *to step down from a high place*……yet better were* it so, than to hide a guilty heart through life.—*Hawthorne.*

Even if she **be** *a heretic*, she is heiress to one of the wealthiest merchants in Devonshire.—*Kingsley.*

It is no devil, I assure you; or *if it* **be**, it has put on the robes of an angel of light.—*Brontë.*

The Muse, *whoever she* **be**, who presides over this Comic History, must now descend from the genteel heights.—*Thackeray.*

(b) 上例の如き場合 should を以て此が代用とする事は一般周知の事である。例へば

Though he **should read** *this book forever*, he would not grow wise.

I will not believe it, *though an angel* **should come** *and* **say** *it.*

Though I **should die** *with thee*, yet will I not

* § 214 末節參照。

deny thee.—*Matthew*, xxvi. 35.

此 should は吾人の所謂假裝叙想法である。尙條件の文句の場合の外時の文句の場合 (§ 190, 2) 及び名詞文句の場合 (§ 157 ; § 172) 等を參照する事は有益であると思ふ。さすれば次の如き shall の由來も明白で意義亦瞭然であらう。

Though all men *shall* be offended because of thee, yet will I never be offended.

(c) **Ever-文句**の場合には上記の動詞助動詞の外 may, might の用ひらるゝ事多きは既に § 186 に指摘せる事である。例へば

Whatever you **may** *say*, I shall not change my opinion.

Whatever you **might** *do*, you could not satisfy your master.

However hard he **may** *try*, he will not attain his object.

Whatever your reasons **may** *be*, you are perfectly correct.—*Doyle*.

However innocent he **might** *be*, he could not be such an absolute imbecile as not to see that the circumstances were very black against him.—*ibid*.

但し此等 (a) (b) (c) の場合と雖も現代の英語に於て

は叙實法を用ふる事多きは外の文句の場合に見たると同樣である。

224. 又前述のものとは形を異にし連結なく、叙想法現在の動詞を先に立つる讓歩の文句がある。例へば

I will go, **be** *the weather what it may*.

We cannot receive him, **be** *he who he may*.

Cost *what it may*, I will help you.

Be *that as it may*, Kidd never returned to recover his wealth.—*Allan Poe*.

Be *it ever so humble*, there's no place like home.

—*Payne*.

Do *what they might*, the hook was in their gills.

—*George Meredith*.

Try *as she might*, Elizabeth could never meet with him.—*Hardy*.

これは極めて原始的の構文であつて讓歩を表はす文句は未だ全く其獨立を失つて居ないので本當の從屬文句ではない。で此形は古くは極めて多く用ひられたけれ共、文法の形式の發達せる今日に於ては其當然の運命に支配せられて上例の如き僅少の場合の外は用ひられない。

225. 古き連結.

(1) **though that** 丁度前章に if that があつた如く古くは此形があつた。例へば

Though that my death were adjunct to my act,

By heaven, I would do it.—*Shakespeare.*

(2) **albeit** 此は元來 al be it (that) で前節に示したものと同樣の構造を有するものに名詞文句が付いて居るのである。古くはよく用ひられたが今日は事實用ひないと言つてもよろしい。尤も詩には矢張用ひられるし、散文に於ても全く忘れられたものでは決してない。例へば

Albeit so mask'd I love the truth.—*Tennyson.*

I was recovering a little and looking forward to Steerforth, *albeit* Mr. Creakle loomed behind him.

—*Dickens.*

226. 短縮. 讓歩の文句の主語が主文の主語と同一にして述語に to be を有する時は、主語と to be とが併せ省略せられる事時の文句、條件の文句の場合と略同樣である。例へば

This punishment, though perhaps necessary, seems rather severe.

Though young in years, our heroine was old in life and experience.—*Thackeray.*

Every station in life, however great and prosperous, has its drawbacks, its checks, its limits.

—*A. P. Stanley.*

又次の如く連結の動詞のみが姿を見せぬ事もある。

However considerable this literary traffic, regarded by itself, it is relatively of small extent.—*Gissing.*

又 whether……or の言方は時に非常に語少なに言表はされる。例へば

They attended conventicle at Emsworth, whither we would trudge, *rain or shine*, on every Sabbath morning.

—*Doyle.*

Dead or alive, nobody minded Ben Gun.—*Stevenson.*

VIII. 比較の文句

227. 比較の文句は次の語を連結とする。

as (主文中の指示副詞 as, so と照應する關係副詞)

the (主文の先頭に立つ指示副詞 the と照應する關係副詞)

than (主文中の比較級の形容詞又は副詞と照應する接續詞)

而して動詞は**叙實法**を原則とする。例へば

He is *as* wise *as you* are *foolish.*

This is not *so* good *as that* is.

I am no *more* scholar *than he* is *orator.*

The more learned a man is, *the* more modest he is.

此の the……the の場合には必ず從屬文句の方が先に來る。尤も as の文句も古くは之れを先にし主文に so

を冠して照應せしめたもので今日にても諺、格言の類に保有せられて居る。例へば

As it is in particular persons, so it is in nations.

—*Bacon.*

As a man makes his bed, so must he lie.

As a cloud darkens the sky, so sorrow casts a gloom over the soul.

As everyman has his cares, so has each man his blessings.—*Geo. Borrow.*

それから又主文中の so, as は屢々省略せられる（時にはその so や as に修飾せらるゝ語句諸共に）。次の如きは此例である。

I cannot tell if I was more tired or more grateful. Both, at least, I was: tired as I never was before that night; and grateful to God, as I trust I have been often.

—*Stevenson.*

At last I turned tail upon their boat ·····and set off running across the isle as I had never run before.

—*ibid.*

I live as I did, I think as I did, I love you as I did.

—*Swift.*

又 Do as you are told; It is as I said 等皆此最後の例と同様の構文である。

尚後れない内に一言斷わつて置く。此 as を連結とする言方は非常に應用の範圍が廣く、文法家は屢々其中より程度度合等に關するものを撰り出して程度の文句 (Clauses of Degree) と稱する組を設け、又方法、模様、仕方等を表はすものを拔き取つて模様の文句 (Clauses of Manner) と云ふ類を立てゝ居る。それも各謂はれのある事ではあるが根本義に於ては比較の文句に相違ないので不用の事と思はれるから、玆には此等を一括して比較の文句と云ふ。故に玆に比較の文句と云ふは上の様な分け方をする文法家の比較の文句よりも廣いものである。尤も其内にも轉化作用の最も著しく、確實なる別地歩を作り上げたものは無論此を他に移した。例へば as soon as* を時の文句に入れ、inasmuch as を理由の文句の連結となし、Young as he was† (古くは as young as he was で實際は比較の文句の轉化である)‡の如きは讓歩の文句に入れた。此等は素より當然の仕打である。又 such, the same につゞく as も比較の文句に屬すべきものには違なきも、一般に關係代名詞と見られ、其領域も廣く用法

* 尤も次の如きは矢張比較の文句である。

I would *as soon* leave to my son a curse *as the Almighty Dollar.*

—*Carnegie.*

† 次の如きは理由の文句である。

Accustomed as she was to deal with cattle, she was not alarmed at her situation [when she was attacked by a drove of cattle.]

—*Doyle.*

‡ 例へば

The world, *as censorious as it is,* hath been so kind.—*Swift.*

も古き歴史を有するから之れを擬關係代名詞と稱して其文句を形容文句中に入れたのであった。

228. 省略. 比較の文句は種々省略せられて殆んど千變萬化の狀態を呈すると言つてもよい位である。が其要は言者の腦裡に樞要の地を占め、此なくしては言者の思ふ所を表はし得ざるものゝ外自由に切棄てられるに過ぎないのである。今少しく例を擧げる

This is as good as that [is good.]

I like this better than [I like] that.

The night was as dark as pitch [is dark.]

A barking dog is better than a dead lion [is.]

尙次の諸例を見れば這般の消息がよく分かる事と思ふ。

No, 'tis not so deep as a well, nor so wide as a church-door.—*Shakespeare.*

There is nothing so baleful to a small man as the shade of a great one.—*Irving.*

I spend as much time as I can with her.

—*J. K. Jerome.*

I am just as fond of children as ever.—*Mrs. Gaskell.*

I never heard a voice so cruel, and cold, and ugly as that blind man's.—*Stevenson.*

It is surely very clear that that side is less well

illuminated than the other.—*Doyle.*

It was brighter than when I had seen it before.

—*H. R. Haggard.*

又 the·····the の形に於ては場合に依りて更らに語數を減ずる事がある。例へば

The nearer the bone, the sweeter the meat.

The sooner, the better.

次に注意すべき例は

I shall act *as seems best.*

He brought about the end of the war sooner *than was expected.*

の如きである。此等の seems や was expected に主語がないのは其昔普通であつた所謂無人稱の構造 (Impersonal Construction 卽 meseems, methinks の如き) の遺跡である。* 尙此例を擧げると

The streets are narrow, *as is usual in Moorish and Arab cities.*—*Irving.*

We hesitated more *than was necessary.*

—*H. R. Haggard.*

229. 省略に關して注意すべき事。as や than に依

* as follows, as regards も同樣で其ため動詞にいつも s がつくのである。as follow や as regard は歴史を忘れて俄かに思付いた誤である。If you please も同樣主語を言はざる形で、you は與格なる事は既に述べた(§ 153)。

る比較の文句が省略せらるゝ場合、後に保留せらるゝものが代名詞ならば、餘程その格に注意せねばならぬ。此事は§142に詳說したから玆には再せぬ。只例のみを示して置く。

He likes you as well as *I* [like you.]

He likes you as well as [he likes] *me*.

He likes you better than *I* [like you.]

He likes you better than [he likes] *me*.

即ちかゝる場合 as, than の次に來る代名詞の格の相違は全文の意味を全く變ずるものである。次の例は正しき例である。

He that loveth father or mother more than *me* is not worthy of me.—*Matthew*, x. 37.

然るに英語には一種の有力なる趨勢があつて He is as tall as *me*; He is taller than *me*; Is she as tall as *me*? (Shakespeare) の如き形が盛んに行はれる。此形は如上の規定には當はまらないが、上例の如く動詞が他動詞なる場合とは異なり誤解を起こす虞はない。未だ文法家は多く認めないけれ共やがては此 as を前置詞として此等の構文を是認せなければならぬであらう。且 His career as a soldier was brilliant などの如き場合 as は前置詞と云はねばならぬ。少なくとも擬前置詞 (Pseudo-Preposition) の名は之れを與へても差支へなからう。尙 than が

前置詞と認めらるべき場合は既に§142に詳說したから玆には省く。

230. than that, as if, as though, than if. 比較の文句には屢々此等の連結を有するものがある。此場合には何時も than, as の次に何事かが言表はさるべきを言はずして一足飛びに言つたものである。* 故に比較文句それ自身が重複文であつて that の次は名詞文句、if, though の次は條件又は讓步の文句と云ふ樣な複雜なる構造なのである。例へば

I desire nothing more than [I desire] that you should come.

The man acts as [he would act] if he were crazy.

I am much happier than [I should be] if I were rich.

He spoke as [he could not speak otherwise] though he were mad.

されば次の規則は事實既に已に知る所である。

(1) than that の次の動詞は叙想法又は should を有するものである (§157)。例へば

It is of greater importance that the treatment be clear *than that it* be *complete*.

Rather *than* (that) *I* should *marry another woman*,

* §40, 1及9等參照。

there are no length to which she would not go.—*Doyle.*

(2) as if, as though, than if の次の動詞は**叙想法過去又は過去完了**を有する（§214及び§223, 2.a: 此場合には代用の規定を適用しない)。例へば

I remember him *as if it* **were** *yesterday.*

—*Stevenson.*

She looks *as if she* **had been** *handsome* once.

—*Thackeray.*

He looked at his clerk *as though he* **failed** *to recognise him.*—*Doyle.*

Her look made our eyes fill suddenly with tears, more *than if she* **had cried** *outright.*—*Mrs. Gaskell.*

Though the distance was greater and the ascent steeper *than if she* **took** *a slanting course,* this way would be quicker because it was unimpeded over most of its length.—*Harold Steevens.*

尤も是等の場合にも叙實法が誤り用ひられたる例はいくらもある。例へば

I always felt as if I *was* riding a race against time.

—*Dickens.*

We did not know what to make of a man who could speak of poverty as if it *was* not a disgrace.

—*Mrs. Gaskell.*

又此等の場合にも種々の省略法が用ひられる。例へば

She could even smile—a faint, sweet, wintry smile—*as if to reassure* us of her power to endure.

—*Mrs. Gaskell.*

The difficulties of my task are disappearing *as if by magic.*—*J. K. Jerome.*

231. 連結につきての特例. 次の三事項は記憶して置く必要がある。

(1) like=as これは文法家の一般に排撃する所で細心な人は用ひないが、口語に於ては（必しも卑俗ならず）此方が普通である。例へば

And then you will give him a nip *like* I do.

—*Stevenson.*

So I offered to typewrite them, *like* he did his.

—*Doyle.*

而して此を歴史的に見れば元 like as (=in like manner as) で like は元來主文につくべき副詞であるのが從文の方に送られて仕舞つたのである（§207 結果の文句の場合に於ける so 參照)。例へば

Like as a father pitieth his children, so the Lord pitieth them that fear him.—*Psalms.* ciii. 13.

(=*As* a father……, so *in like manner*……)

(2) as*=than これは今日に於ては先づ廢語であるが、

* 獨逸語 als=than. 英語の as も此と同系語。古英語 ealswa, 中古英語 als (also はこの姉妹語)。